
ウルトラマンダイナアナザー STRIKERS

一文字 猛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンダイナアナザー STRIKERS

【Nコード】

N34410

【作者名】

一文字 猛

【あらすじ】

それはウルトラマンダイナアナザーとは違う世界のダイナの話、ダイナはブルトンを倒したと同時に、魔法のある世界へ飛ばされてしまう

プロローグ

その世界は宇宙などに進出し開拓を続けている世界

だが

人はなぜ宇宙に憧れるのか？

水も空気もない聞こえる音すらない暗闇の中なぜ人は新しい夢を追いかけて続けるのだろうか？

と思う人もいるかもしれない、そしてそれを邪魔するものもいるかもしれない

そして、地球を狙う怪獣や宇宙人達から守るために作られた組織<SUPER GUTS>と共に闘った戦士

ウルトラマンティガ、ウルトラマンダイナなどの光の戦士

そして今、その光の戦士のウルトラマンダイナが宇宙でふじつぼだらけの岩の様な姿の四次元怪獣ブルトンと闘っていた

ダイナの拳がブルトンに当たる寸前でブルトンは消えてダイナの後ろに回り込み超能力でダイナを

隕石にめり込ませたがダイナは青のラインと銀色のボディのミラクルタイプに姿を変えブルトンの周りの超能力で作ったバリアの様なものを破壊し一番射程距離のある

ソルジェント光線を使うためにフラッシュタイプに戻り

ソルジェント光線を打ち込んでブルトンを倒したが

ブルトンは死ぬ間にブラックホールを発生させ
ダイナをその中に引きずり込んでブルトンは爆発した

「くっ………しまった！ぐわあああああ！?!?!?」

ダイナはブラックホールの中でダメージを追いながら
どこかにつながる出口を見つけ脱出したが
その降り立った場所で意識を失ってしまう

プロローグ（後書き）

次回「怪獣出現、異世界でのFast Battle」

主人公設定

名前 古代 巽こだい ことむね

17歳 男

SUPER GUTS所属 隊員番号07

好きなもの 人の笑顔、コーヒー、紅茶

嫌いなもの 人の泣き顔、人を機械として扱う人

性格は何にでも優しくし喧嘩の仲裁役をしたりしていたため
彼を慕う人が多い、そして鈍感

ウルトラマンダイナ

フラッシュタイプ

スピード、パワーのバランスの取れた姿で使える光線技は数多い

ミラクルタイプ

スピードが強化されている姿

超能力が使えるようになる、巽のお気に入り姿でもある

ストロングタイプ

パワー重視で攻撃はすべて強力で巽はその中でも
バルカンシング、ガルナイトボンバーを多用する

巽はこの姿を少し嫌う

巽の武器

トンファー×2

ガッツブラスター×2

折り畳み式ブレード

GUTSハイパーガン×2

カプセル怪獣

ウインダム

ティゲリス

リドリアス

モスラ

リトラ

を所持

「怪獣出現、異世界でのFast Battle」

ダイナだった人物「古代 巽
は目を覚ました

（俺は確か宇宙で戦っていたはずなのになぜ地上にいる？そしてここは何処だ？）

と書いた道をまっすぐに歩いていたら鉄道を見つけたが何かおかしいがとりあえず
タダ乗りをしようとその鉄道の屋根に飛び乗ったがいきなり
ビーム攻撃を受けた

「いきなり攻撃はないっしょ!？」

相手は巽の死角から撃ってくるため巽も回避するのがやっとだったが
その攻撃仕掛けてきた物が姿を見せた時
巽は

（何だこいつら？ロボット？）

と感想を思っている間にも相手は撃ってくるので
GUTSハイパーガンをホルスターから抜き出し
そのトリガーを引き攻撃する

相手は3、4発受けた程度で爆発したが
その相手と同型の機体がぞろぞろ巽に攻撃をしてくる

巽は応戦するがGUTSハイパーガンのカートリッジがからとなり

排出される

が巽は装填することなくホルスターに戻し、

ガッツブラスターをホルスターから抜き出し撃ち始め

あいている左手に折り畳み式の長大な刀身を持つ実体剣を取り出し
機械を切り味始めるがそこに激しい揺れが起こると同時に4人がい
つの間にか

来ていたヘリから降りてきていた

しかし、今の彼にとってはそれどころではない。

自分の武器がきかない相手と対等に戦うにはウルトラマンの技を使
わざるを

得なかつたが

それはここにいる4人に正体をばらしてしまう事だつた

それでも巽はフラッシュ光弾を使いそのロボットを倒し、

その光景を見ていた4人にはれたと思つた巽だつたが

青い髪の少女と赤い髪の少年はなんか目が輝いている

その輝き方は憧れの視線だつたが、残りの2人は完全に見抜いている

がそれを今は気にしている暇はない

巽は腰にマウントしてあるトンファーを取り出しロボットをたたき

つぶし始め、

あらかた敵は殲滅し終わり

オレンジ色の髪の少女が巽を少しにらみながら口を開いた

「すいませんが連行します」

巽は明らかに捕まると判断した

「なんで連行されなきゃいけないの!？」

と反論するも

「理由は質量兵器使用です」

「は？だって質量兵器じゃないと怪獣たちと戦えないよ」

「怪獣？テレビの見すぎ」

「ギイシヤアアー!!」

とオレンジ色の少女が言い終わると同時に崖の上から怪獣の鳴き声が聞こえてきた

そしてピンク色の髪の女の子といっしょにいた

ドラゴンは少しおびえていた

その声で巽は怪獣を判断したその怪獣とは岩石怪獣サドラ

サドラは山へ入り込んだ人間を襲う両腕のハサミは鋭い刃がついており鋼鉄をも切り裂く。身体の数十本の関節は自由に曲げる事が可能な怪獣で

もう一体別に怪獣がそこには居て岩石の色とほぼ同じ色の怪獣

地底怪獣デットンこいつは兄貴分のテレスドンとは違い

火炎放射は使えない

「なぜあいつらがここに？」

巽はそう無意識に言ってしまった

それは当り前のことかもしれない、巽自身、異世界に飛ばされたという

事が判明していて、この世界に怪獣が居ないと確証まで取れているのに

なぜあの怪獣たちはこの世界にと巽自身分らないでいるのだ

しかし、あの2体があそこで戦えば岩石がこの列車に

衝突する恐れがあり

巽は懐からリーフラツシャーと呼ばれる物を取り出し
空に向かって突き出し変身した

(もうばれてるんだから、もういいや!!)

巽は光に包まれその光は崖の上まで飛んでいき

崖から離れてところに光の柱を作り

中から銀色で、青と赤のラインが入りプロテクターを付けた

ウルトラマンダイナがそこに現れた

ダイナは怪獣たちの注意を引き、崖から遠ざけた

怪獣たちはダイナを追いかけて攻撃してきた

ダイナはデットンの頭をつかみそのまま飛び越え

サドラにとび蹴りを決め、着地したと同時に

フラツシュサイクラーをデットンに当て、そのままの勢いでサドラ

に目標を変えるがサドラはさっきの4人と1匹を乗せたと思われる

へりに自慢の

伸びる鎌で襲いかかろうとしていたのだった

「シュワッ!!」

ダイナは一瞬でへりの前まで移動しサドラの伸びる腕をギリギリの
ところで

捕まえたが、サドラがその腕を縮め自分の近くにダイナを寄せ

片方の腕でダイナの頭を殴る、

サドラの腕にある缺は岩をも簡単に砕く強力武器なのだ

それをもろに食らったダイナは地面に倒れこむ

そこへサドラの蹴りが腹に命中する

それに続いてデットンがダイナを無理やり立たせ

羽交い絞めにしサドラに殴らせていたが

ダイナはサドラにカンガルーキックを決めてデットンを

投げ飛ばしダイナはフラッシュバスターを右腕を振りながら放ってサドラの弱点に当てサドラを怯ませ、サドラの腹に蹴りを加えて、

腕を十字に組み3タイプ主要必殺光線の中で最強であり

フラッシュタイプの必殺技のソルジェント光線を相手に打ち込んだサドラは苦しみ爆散し、ダイナは残りの一体のほうへ向きを変えたデットンはサドラが負けたことにより逃げようとしていたがダイナのソルジェント光線を食らいサドラと同じく爆発したが普通なら残骸が残るのに跡形もなく消えたのだった

しかしそのあたりに鐘の鳴る音が聞こえたことから巽はこの怪獣たちを呼び出した犯人を把握したがそこへワームホールが発生し中から怪獣がどくる怪獣レッドキングが現れた

レッドキングはダイナに早速突進したが

ダイナはそれを蹴り飛ばしたがレッドキングは怒り

「ギャオオオオオオ！」

と咆哮をあげダイナに襲いかかってくるが

ダイナはソルジェント光線を放つがレッドキングはそれに耐えてダイナを持ち上げ地面にたたきつけるダイナは頭から落ちたためダメージが

半端なく胸のカラータイマーが鳴り始める

レッドキングはダイナの腹を何回も踏みつけ、

尻尾でダイナを叩くとへりに岩を投げようとしたところを

ダイナがチャージソルジェント光線で倒したのだったが

疑問に思う事が一つある

なぜ怪獣たちはへりを狙おうとしたのかと巽は思いながら変身を解

いて
へりに連行された

「怪獣の存在しなかった世界」

何とかこの世界で怪獣を倒した

僕だったけど、この世界じゃ質量兵器はだめらしく

それに少しでもこの世界の情報が欲しいし、この人たちは
どうやら防衛軍的な感じがするから

そこならブルトンや怪獣の情報が手に入るはず！

Story 2 「怪獣の存在しなかった世界」

巽は機動六課と呼ばれる部署につれてこられ、身分を証明するものが
やはりこの世界と違うためか詳しく調査されている

「持ち物すべて出してください」

とオレンジ色の髪の少女、ティアナ・ランスターに言われた

巽だったが出しにくい、いや出せないものがある

それはリーフラッシュヤーとカプセル怪獣を入れるケースだったが
ケースは思いつきり見えているので
渡さなければならぬ

「やはりこれもですよね・・・」

と見逃して！という思いを乗せて言うが

「当り前です」

と轟沈・・・仕方なくの渡そうとするが

「これはいいよ、光の巨人さん」

と今度は青い髪のスバル・ナカジマに言われる

まあ異にとつてはリーフラッシャーが戻ってきたのは嬉しいが
一つ気になる点が・・・それはスバルが言いふらしていないかという事
残りの3人は口が重そうだがこの人だけは軽そうだった

「スバルさん、もしやとは思いませんが俺の正体ばらしていませんか
よね？」

と恐る恐る聞くとスバルは笑顔で

「ううん、言っていないよ、言ったら元の星に帰えちやうんでしょ？」

なぜその設定を知っているの？と異は思ったがそれを逆手に取った

「そ、そうなんだよ、良かった」

何とかばれずにと思ったが

「何いってんのよ、私たちの前で堂々と変身したくせに」

まあそんなことありましたねと愛想笑いしたが

カプセル怪獣が一つもないとつらいので何とかねだろうと動いたと
同時に

カプセルケースから何かが飛び出した

それは翼がもしもの時に使おうと思った怪獣の一体の
モスラのカプセルだったが出てきたのは
手のひらサイズの幼虫だった

「きゃっ!?!」

「芋虫!?!」

「モスラ一体どうした?」

「キユウウウ・・・」

「あつ、寂しかったのかごめんね」

ちびモスラを巽は抱え、いや抱き上げて、赤ちゃんをあやすようにしていたのを
見つめている二人だった

「モスラ、もういいかい?」

「きゅい!」

モスラの幼虫は嬉しそうに答え、カプセルに戻った

「また今度な、ってお二人さんどうかしましたか?」

二人はさっきの巽の行動を見て固まっていた
それもそのはず、怪獣と思われるものと
仲良くしたのとして相手が芋虫的なものだから!

「いや・・・あれ何?」

「えっ・・・あっそうですよね、さっきの怪獣は、守護神モスラで
す」

そう説明しているとスバルは別のほうに反応していた
巽はティアナに説明中で気付いていなかった

「ねえねえさっきの何？なんであの子出てきたの！？」

いきなり質問してきたまではいいがめっちゃ近い・・・
巽は少しのけぞり、

「スバルさん顔近い、近いよ」

「バカスバル！」

ティアナはどこから持ってきたか分からないハリセンでスバルを叩
いた

そしてスバルはその場にしゃがみ込んでティアナをふくれっ面で睨
んでいた

そこへ、エリオとキャロが入ってくる

「巽さん、八神部隊長が呼んでいます」

「分かったよ・・・（多分、持ち物の返却だろうな）」

巽は武器とSUPERGUTSの装備を一式渡している、そして他
の物も

調べられることとなったわけだ

「悪いけど、案内してもらえるかな？」

と巽はエリオたちに言いついていこうとするが
スバルがまだカプセル怪獣の事で質問してくる

巽は一応原理を説明したが当の本人には難しすぎたようで頭の上に？マークを浮かべていた……

部隊長室前に着いた巽はノックし入ろうとするが

「失礼しまゝす」

「失礼すんなら帰って」

「はいわかりました」

と言い出てしまったが、なんも解決してないというよりもなんも話してないことに気づき戻る

「ってそれじゃ呼ばれた意味ないじゃん!!」

「ナイスツツコミや!」

「で、用件は?」

「えっ」と

「SUPERGUTS所属、ガッツイーグル 号専属パイロット古代 巽です」

と長い紹介文句をきちんと言った巽に対して

「うちはここの隊長の八神はやてよろしくな」

と言われた巽だったがそんなに堅苦しくないと判断し
椅子に腰をかけた

「この世界は僕の居た世界とは違っていてことですよね」

「そうや、巽君がいた世界とは別世界、この世界には怪獣なんても
んは居ない」

「やはり、先日の戦闘でティアナさんたちを始めとしたあのチーム
の驚きようで分かりました」

「そうっか、なら話は早い、あの光の巨人は巽君やろ」

「いえ違います（スバル達バラしたな・・・）」

「そっか・・・いや強引過ぎたかもしれへん」

「えっ？」

「さて本題や、君はこれからどうする？」

「どうするって言われたってブルトンが召喚した怪獣とブルトンを
倒さないといけない」

「ブルトン？」

「ブルトンと言っつのはこれです」

と巽は言いながら通信機のようなものを取り出しブルトンの映像を
出した

その姿を見たはやては険しい表情になり何か考え始めた
が巽も同じような表情にそれはこの世界に居るブルトンが自分の世
界の怪獣ではないかという心配と自分が倒し損ねたばかりにとい
う責任がある

「この怪獣は君が来る3日前には確認されとるんや」

「何だつて!?!それは本当ですか!?!一体何処で!?!...すみま
せんでした」

「一体どうしたん?」

「あのブルトンはこの世界に来る前に戦った怪獣で倒したと思った
直後にこの世界へ飛ばされたもので取り逃がしたやつかと思ってい
たもので、それにブルトンのせいで怪獣がこの世界でも怪獣を召喚
しているかと思うと怒りが抑えられなくて」

と巽は自分の本心をきちんとウルトラマンであることは隠したうえ
で話した
がポケットに入れといたカプセルが何かに反応しいまにも出てきそ
うだった

(モスラ待て今出てくるとまずい、非常にまずい)

しかし巽の思いとは裏腹にモスラは六課の近くに元の大きさで出現
したがその瞬間に

空が窓ガラスのように割れ、中から四足の超獣ハンザギランともう
一体は

カプトガニと宇宙怪獣の合成超獣のキングクラブだった、モスラは
その出現を

察知していたのだろう。

しかし、今のモスラは幼虫使える技は糸を吐く、体当たり、噛みつく、ぐらいで

相手にダメージを与えられるか心配なうえ相手は怪獣より強力な超獣、

明らかにモスラだけでは勝ち目はない、巽はその場から姿を消し

六課の通路を駆けていた

「なんであいつ先に!!」

何とか六課の外へ出た巽が目にしたものはモスラが頑張って2体の動きを止めようと糸を吐き続け何とか動きを止めていたのだったが簡単にその束縛は外され

2体はモスラに狙いを絞っていた

「ダイナ!!!!!!」

巽はリーフラッシャーを空に向け変身した

その時ティアナたちも戦うために武器を構えていたがハンザギランの溶解液が当たりかけていたがダイナが身を持ってそれからティアナたちを庇い

ハンザギランの方に向きを変え腕を胸の前でクロスさせ頭のダイナ

クリスタルが

青く光りダイナの姿を変えた

銀色の体に青のラインが入ったウルトラマンダイナミラクルタイプと変わりハンザギランの二度目の溶解液を念力で空中で一纏めにし、相手に打ち返し相手を溶かした

「蛇は自分の毒に対抗すべを持っていないか・・・」

とティアナは頭上で1体倒したダイナに向けてそう言った
ダイナはその言葉を聞いていないいや聞こえないというよりも
今はそれどころではなく、モスラの事が気がかりだった
そのためにミラクルタイプにタイプチェンジしたのだが
残る相手はキングクラブ、強靱で長い尻尾を持つ相手だ
モスラはキングクラブの尻尾に岩にしがみ付きながら噛みついていて
それを見たダイナは相手の頭に空高くからのとび蹴りを決めて
体制を立て直した相手に連続パンチを決めまた頭に蹴りを決めだが
相手の自慢の尻尾に捕まり身動きが取れなくなっていた
ダイナはそのまま地面に何回か叩きつけられ

が相手の目玉に青い閃光が命中すると反対側にも爆発が起こり
キングクラブの尻尾の締め付けが弱まりダイナは抜け出し
サムズアップをスバル達の方に送り
構えを取り直すがまた尻尾がダイナに迫っていたが
フリードの火球により防がれ、その爆発がダイナに尻尾が近付いて
きたと知らせ

「モスラ噛みついておいて！」

モスラが噛みつく、ダイナはキングクラブの正面に立ち
進行を止めようとするが相手の火炎放射を食らいかけるが
それを吸収しレポリュートウェーブを打ち込み
倒したがその背後からブルトンが現れダイナをまた別の世界へ
飛ばそうとしたがモスラのプチレールガンにより
触角を破壊され残った触角は自分の身を隠す能力を持った物だけだ
った

「モスラお前そんな技いつ覚えた？」

「キユイ？」

「まあいい今は！」

ダイナはブルトンに向かって走っていくがブルトンは最後の触角の力で

姿をその場から消そうとしたところに

ダイナがレポリユートウェーブを当てブラックホールに流し込んだ
その後ダイナはモスラを回収し空へ飛んで行き

アリバイを製作し六課に戻ったが

はやてに早速バレていた・・・

理由は、変身物はすぐに消えた人物がその戦士や！との事

異はこの世界で誰かに会うたびにバレていきそうだ・・・

「デバイスと異と作戦」

この世界だと僕がダイナだという事は隠し通せないらしい……
いつそみんなに言おうかなと最近思うけど、
けどそれどころじゃないかも知れない……
ブルトンが召喚した怪獣がまだいるかもしれない

Story3「デバイスと異と作戦」

青いズボンと青い服に白いコートを着た青年が両手に銃を構え道路を走っている

その後ろからガジェットと呼ばれるものが追ってくる

「よし、相棒ここはノーマルで行くぞ！」

<OK>

銃身を3体のガジェットの方に向け銃弾を3発撃つ、その銃弾は相手を貫き倒し、銃型デバイス『スペリオル・ファイヤー』（通称スペリオル）
をホルスターに戻そうとした瞬間
空から銃撃を受けるが即座に上昇し

「マシンガンで行く！」

<bullet change>

異はトリガーを引き空に浮かぶガジェットを文字道理蜂の巣にし、着陸したが今度は大きいガジェットが現れ、銃弾を撃ち込むも

装甲がへこみ続けるだけだった

「これって必殺技フラグ？」

<YES>

「OK、カートリッジリロード！行くぜ！！」

<cartridge reload>

「ソルジェントブレイカー！！！」

銃身に魔力を溜め、そしてソルジェント光線と同じような色の攻撃をそのガジェット？型に打ち込んで倒した

そして、敵がいらないことを確認するとホルスターにスペリオルを納めた

こうなったのは昨日、戦闘データを取りたいと言われ異は断ることができなかった理由は部屋を貸してもらっているからだ（お金はウルトラマンの力で変換したので大丈夫）

「にしても軽いな」

と出口に向かっていたが何者かの気配を感じ、スペリオルをその気配の方向に向けるがそこに居たのは

その少し前

FWを始めとするメンバーが異の戦いを見ていた
異の動きは所々ダイナと酷似した点があることにみんな気付き始めていた

「シャーリー、データは取れた？」

「あと少しです、呆気なくガジェットがつぶされたので」

「なら私が」

とシグナムが目を輝かせながら名乗りのだった

そしてNOW

「なんか展開読めた気がする」

と巽はため息をつけながら言いそして確認のために

「これで終わりですよね？」

「いやこれから「分かりました！」一体何がわかったというのだ？」

「いやどうせ私と模擬戦だあ！とかいうんでしょ」

どうやら凶星らしい巽は構えを崩さずに、

ビルの上にあつた小石が落ちたと同時に両者動き出す

巽は銃を構えながら近づくと一瞬にして姿を消し

シグナムの視界のみならずみんなの視線から消えていたが

突然、シグナムの背後から出現し踵落としを決め

スペリオルを両手に持ち銃撃を決めるが爆煙から鞭のように何か
巽に向かってきたふあ巽はかわす事無く

その物は巽をすり抜けた

「何!?!」

そして観戦していたみんなも驚いていたが
さらに驚くことに巽は三人シグナムの周りに現れたのだった

「えっ 巽って三つ子!?!」

「んなわけないでしょ」

と驚くスバルにツツコミを入れるティアナだった

「喰らえ、ダイナミックアタック!?!」

巽は3人から12人まで増えて周りを囲みソルジェントブレイカー
を決める

さすがに逃げ場もなければプロテクションで防げないのだったが
溜め終わる前に連結剣ですべて倒されたが

まだ1人シグナムの後ろに立ち

腕に赤い球体を持ち至近距離で打ち出しそうと

「ガルネイトオオオボンバアアアア!?!?!」

「はいそこまで!?!」

とギリギリのところまで止めた巽だった

「つち」

「ねえ今の舌打ち何?」

と言われ巽は笑顔で

「いえなんでもないです、ただ口に土が入っただけです」

と言いつつその後、自室に向かおうとしたが
スバル&ティアナに捕まった

「さっきの分身技何？」

「さっきの赤い技なに？」

「悪い企業秘密！！」

巽は言いきると走って逃げ、

自室のシャワーを浴びカプセル怪獣の体調を確認していた

「ウィンダム、ティギリス、リドリラス、リトラは大丈夫っぽいね」

「でモスラは・・・寝てるし・・・」

巽の部屋には、リム化した怪獣たちが遊んでいた

ウィンダム、リドリラス、ティギリスはサッカー

リトラはこの世界の本を読み

モスラは巽のベッドで検査する前に寝てしまった

巽はウィンダムたちと一緒に遊んでいたがノックオンが聞こえた瞬間

「みんな、又イグルミ！」

その号令とともにリムカプセル怪獣は動くのをやめて

モスラは巽が布団を上からかけた

「どちら様ですか？」

「僕ですエリオとキャラロです」

「開いているから入ってきていいよ」

「失礼します」

と部屋に入ってくるエリオとキャラロ

巽は2人にお茶を入れる

「どつたの？」

とお茶を差し出す巽

「今度の作戦の事と、巽さんは元の世界でどうやって怪獣と戦っていたんですか？」

「そうだね、戦闘機に乗ったり、変身して倒したりだね、あとは皆で協力して倒したり」

「巽さん一人で倒せない怪獣がいるんですか？」

「当たり前だよ、3分間しか活動できないしそれを過ぎれば死ぬんだみんなの力がなければ3分間でさすがに怪獣を倒しきれないしね」

と巽は普通な顔で話すがその内容はいつ死ぬかわからないし、3分という短い命で戦っているのに平然と話せる巽がすごいと

若い二人は感心していたそこに巽は

テレビをつけ自分の戦っている映像を見せた

「これは僕の世界での戦いで相手はワロガだけどこの後カオスワロガに姿を変えて

僕と父さんが戦うんだけどギリギリの戦いだっただ

その映像は巽Ⅱダイナと巽の父親Ⅱウルトラマンティガとカオスワロガの一戦だったその戦いはワロガが優勢であったが戦闘機などの攻撃により隙が生まれダイナとティガの合体技でカオスワロガを倒したその時間実に2分45秒そしてダイナとティガは光のようにその場から姿を消した所で映像は終わった

エリオとキャロそしてフリードは驚きを隠せていない

「こんな感じで援護をしてもらえたから勝てた戦いもあるんだ」

「巽さんでも苦戦した相手がいるなんて」

「まあこのときは君たちとおんなじ歳かな？」

「って事は10歳？」

「じゃあ巽さんって何時から戦っているんですか？」

と二人から質問される巽

巽は表情を変えずに答えた

「そうだね小さいころからずっと戦ってきたとしか言えないね」

「怖くなかったんですか？」

「そりゃ怖いさ、でも守らなきゃいけないものを知ってね」

「守らなきゃいけないもの？」

「仲間、その星の人々、一緒に戦う仲間……」

という巽の目には少しばかりの水滴が溜まっていたが小さき戦士たちには
ばれていなかった

「さあて今度の作戦ってオークション会場の警備でしょ？しかしなんでホテルで開催すっかな？」

「人が集まるからですかね？」

「でも密輸の可能性もあるわけだし、人気のある場所は避けた方がいいと思うんだけどな」

と巽は徐にベッドに腰をおろしたがそこには

「キユイ！！！！！」

「えっ！？？」

「何！？？」

「おわっ！？？」

上からモスラ、キャロ、エリオ、巽の順である

モスラの悲鳴？に他のカプセル怪獣たちも反応してしまい動き始めた

「皆戻れ！！」

巽の号令とともにカプセル怪獣達はカプセル状態に戻った
その後任務の再確認を終え、エリオたちは自室に戻った

しかし巽はさっきの映像の冒頭まで巻き戻しし、

「今度、お前みたいな事には絶対させないから、見守っていてくれ
な、未有希」

そこには一人の女性が巽と一緒に映っていた

「ホテル・アグスタ護衛任務」

僕もこの世界に慣れ始めたが元の世界での悲劇を
思い出してこの世界でも何か失いそうで怖いけど
もう二度とそんなことしないってあいつと約束したんだ
守りきるそれが今の僕にできるただ唯一の事……

Story 4 「ホテル・アグスタ護衛任務」

現在ヘリにて移動中

目的地はホテル・アグスタ、そこで行われる骨董美術品オークション
今回の作戦内容は会場警備、人員警護だ

そして今、部隊長らの再確認が行われている中

異は別の事を考えていたそれはガジェットならまだしも
怪獣がその骨董美術品に釣られて出現する可能性があるのだ
そうした場合、この世界では怪獣という認識やまずある程度出現し
ていないため

異の居た世界とは違い逃げ遅れた人が多く戦い辛い可能性がある

「異君、聞いている？」

「あ、はい聞いてます、ロストテクノロジーがレリックと誤認され
ガジェットが来る可能性があるってことですよね」

「ちょっと惜しいね、ロストロギアね」

「すみません、前の世界で似ている言葉があったので」

と異は頭をかきながら言ったが

何か心配なことがあると周りに悟られかけた
理由は簡単、巽はすぐに顔に出るタイプだからだ

その後の説明は再開され、巽は全部聞き
持ち場についた

(しかし、やっぱり気になるな〜皆パニックにならないかな?)
と巽は思いながら見張っていた
が何もやることなくそしてなぜかリス等が寄ってきた

「なんで?」

とそこへ

『来ましたっ!ガジェットドローン陸戦?型、機影30、35……』
『陸戦?型、機影2、3、4!』

「リス君たちここは危ないから逃げなよ」

巽はバリアジャケットに身を包みそして、空へ飛び
指揮官に連絡を取った

『こちら巽、敵を確認、攻撃許可を』

『今やってるのは防衛戦だから殲滅しなくてもいいのよ』

『了解』

(数が多い?いやこいつらがまんべんなく広がっているだけだ)

巽はスペリオルのトリガーを引き目の前に居るのを落としていくがなぜか巽は目の前の敵よりも他のみんなが心配だった

その油断が敵の侵入を許してしまいかねない

「やっちゃった〜」

巽は前にティアナ、はやてにウルトラマンの技を人間状態では使用するなど

言われたばかりだった。

そして巽の周りの敵は倒しティアナたちと合流するため移動したが巽の感じていたものが現実となるとは思いもしなかっただろう

巽の目に映ったのはティアナの誘導魔力弾のクロスファイアーがスバルに向かっていった所だった

「スペリオル、エクセルダッシュで一気にスバルの前まで飛ぶ！」

< However, you cannot move if you do so it >

「大丈夫、動けなくなるってもコンマ一秒だ」

エクセルダッシュというのは、光速で動く技だが動いた後はすごい圧力を体に受けるため、たとえ巽でも動けなくなるのだ

そして移動した巽は一時的に動けなくなったがクロスファイアーの方に向き直り

「えっ巽？」

「スバル少ししゃがんでいろー!!」

クロスファイアーを巽は受け止め、ガジェットの方に飛ばそうとするが

「レボリユートウエーブ……ティアナ！フレンドリーファイアーになるとこだったぞ！」

「あ……」

「いや何も言わずに目の前の敵に集中しろ!!」

と巽は叫び、エリオたちの援護に向かったが

「腕痛てえ〜生身じゃやっぱきついな……」

< A c c o m m o n p l a c e >

「アンタ酷いよ……しかしまあ、あんなふうに俺もやってたのか」

と目的地に飛んでいたがその後方に機械怪獣が現れ、目の前に居る巽に攻撃を

仕掛けてきた

「後ろ！？ティアナ達が危ない」

巽が振り返るとそこには、ズイグルしかし、巽が知っている個体とは違い

全身機械の銀色の　ズイグル？だ。

ズイグル？が黄色い光弾が迫ってくるが巽はウルトラマンの時とは違い体が小さいため、回避し攻撃するが相手は

今までの生身の怪獣と異なり機械で出来ている怪獣には巽達の魔力弾では

足止め位しかできず、ダメージを与える事が出来ない

「っち、こいつもレリックと誤認して！」

ズイグルは元々、捕獲用メカ獣であるため目標とするなら

光の力のある巽ぐらいしかないのにホテル・アグスタに

進路を向けている巽は懐に隠してあるリーフラッシャーを取り出し、

ズイグル？の目の前でティアアナ達が魔力弾を撃ち続けていたが

ズイグルの恐ろしさを知らないこの世界の住人達に巽は叫んだ

「そいつの前から今すぐ離れろ！！！」

「でもよ・・・」

「いいから早くどけ！！俺がそいつをやる！！！」

ヴィータが何か言おうとしたが巽はそこから早く戦っている人を退かしたかった

そう　ズイグルは捕獲用なのだから人質を取られるのが巽にとつて最悪の事態だったのだが時すでに遅し、ティアナとスバルが十字架状の檻に捕らえられてしまったのだ

「なんてこった」

と呟きながら変身した巽は　ズイグルをホテル・アグスタから遠ざ

「巽さん頭から血が出てます!」

「えっ・・・あっマジだ」

キャロに言われて気付いた巽は頭に手をやり目の前に持つてくると赤い血が付いていた、

「シャル先生はどこ?」

その後本部にて巽は、シャルに治療されたが

5日間は右目には眼帯のような大きいガーゼが付くらしい

「巽さん、どうですか?」

「大丈夫、大丈夫心配してくれてサンキューなエリオ、キャロ」

しかし巽は心配される側ではなく、心配する側が変わった

「スバル達は?」

「今、帰ってきますよ」

とシャルに言われた巽は片目に慣れることと同時に迎えに行ったが階段で早速こけた

そして、ヘリポート

「お帰り〜」

「巽!?!目大丈夫?」

「大丈夫、それよりお前らは大丈夫か？」

「えっ大丈夫だったよ？」

とスバルは答え、

「ティアナは？」

「私も大丈夫」

「なら、よかつた〜引き剥がすために力いっぱい掴んだから潰されてないかと」

「酷いよ！！巽！！！」

「いや、あれはね俺とて頑張ったんだからな！」

「ってか堂々と言っていいわけ？」

「もういいんだ、だって怪獣にとどめを刺した技は一回皆の前で使ってるから」

「あの赤い弾？」

「ああ、しかしよかつたよ、二人とも無事で」と言い残し巽は何処かへ向かう
が後ろから聞き取れなかったが2人が

「・・・とっ」

と聞こえた言葉を巽は糖分が欲しいと勘違いしたのだった

設定：相違点 編

今回はダイナアナザーとの違いを説明します

ダイナアナザーとこのアナザーSTRIKERSの登場人物は異なる世界は同じでただ違うのは防衛組織の名前と巽の年齢です

ダイナアナザーは16歳ですがこのアナザーSTRIKERSは17歳という事

後、未有希というSTRIKERS巽にとって重要な人がいるという事です

まあどちらにせよ、巽にはカオスな展開（彼女のな意味）が待ってるってことは変わりないです（笑）

それとこちらのダイナSTRIKERSはマルチエンディングにしようかなと思っています

（巽を助けるため？）

って感じですよ。

ウルトラマンダイナアナザー、ウルトラマンダイナアナザーSTRIKERSの両方を

よろしく願います！

「勉強会？」

ホテル・アグスタでの戦いで負傷してしまったけど
何とか皆無事だったのが幸いだったかな？
でも人質を取られてしまうのはもう……

Story5「勉強会？」

「えっ？ダイナや怪獣の事が知りたい？」

とエリオに質問された巽は少し考え

「いいよ、今から？」

「いえまだ仕事が残ってるので、巽さんは？」

「いや終わったよ30分で代わりにエリオとキャロの分やるっか？」

「早っ！？」

「ってスバル何時の間に？」

いつの間にかスバルまでそこに居た

「まっ、エリオとキャロの分終わらせるのに1分ぐらいかかるかな
？そしてスバル私もって顔するな」

「だっっ〜」

「だってじゃないよ、こっちの授業は時間が必要だから・・・分かったスバルのもやるよ」

スバルは今にも泣きそうな目で巽を見つめていたため巽は折れた
巽は女の涙目にはめっぼう弱いのだった（ダイナアナザーでも同じ）

その1分30秒後

「振り切るぜ！！！！」

「もう終わってるくせに」

「いやそこはツツコミ入れないでって」

と巽に珍しくツツコミを入れるスバル、
しかし、そのスピードに驚いていた。

「さあて、行きますか、皆」

「「はあ〜い」「」

巽の部屋では巽がテレビ等をいじっているうちに何人が増えていた
のをツツコミたかった巽だった。

「何時の間に全員集合？」

「ええやん」

「とりあえず、ダイナの3タイプから説明するね」

とテレビに映ったのはダイナの3つの姿だったそして巽は、まず真

ん中に映っている
ダイナ・フラッシュタイプから説明した

「まずこれが、ダイナの基本形態のフラッシュタイプ、必殺技は腕を十字に組んで発射するソルジェント光線」

と巽の居た世界での戦闘映像が流れているが巽は途中で口をはさんだ

「あ、これはソルジェント光線じゃなくてスペシウム光線っていう別の技」

「なんで同じモーションなんですか？」

とリインの質問に巽は

「そうだね、簡単な方が撃ちやすいって言うのとソルジェント光線の効きかない相手に対抗できるからかな？」

と答え今度は右に映っていたミラクルタイプの説明に入る

「このミラクルタイプはスピードが3タイプの中で一番だけどパワーが

落ちるのが欠点、だけど超能力が使えるようになる、必殺技はレボリユートウェーブ」

テレビにはダイナ・ミラクルタイプの活躍が映っている

相手はキリエロイドだ、相手との激しい攻防戦は子供（スバル、リイン含む）を虜にした

「そして、これが僕の最大の分身技ダイナマジック」

ダイナマジックで6人に分裂したダイナはバルタン星人に挑んで互角に戦い

最後は一体になったバルタンにスペシウム光線でとどめをさした

「最後にストロングタイプだね、このタイプは3タイプの中では、力が強いけど

スピードは下がるけどやわな攻撃では怯まない」

そう、テレビに映っているストロングタイプはミサイル攻撃でもびくともせず、

相手のメカ怪獣に殴りかかるそしてガルネイトボンバーでとどめを刺した

「今のがガルネイトボンバー前の戦いでも使用した技だよ」

「ねえ、巽はどのタイプが好きなの？」

「そうだね生まれてから17年一緒に居たからどれも同じぐらいかな？」

「『『『『『えっ17歳？』』』』』」

はやて、ヴォルケンリッター達は驚かなかったが残りのメンバーが驚いていた

巽はその驚きに驚き操作を誤り、

『巽っこっちおいでっ』

「おわっ!?!間違えた?」

と元の映像に戻そうとしたがリモコンがテレビ台の下にもぐりこんでいた

ためテレビ台の下に手を伸ばした

「ちよつとほのぼの映像を……」

『巽兄い遊んで〜』

『ええ〜、準と遊んでて』

『やだもん』

『なんでさっ?』

『弱いから』

『準お前』

『兄貴分かるでしょ?』

『まあ分かるが、30連敗はないだろうそれからこれから烏狩りなんだし』

「古代、烏狩りというのは?」

「ああ、烏狩りっていうのは業界用語で、烏みたいな宇宙人で人間を採集し食べるのレイピーク星人の基地を叩きに行くって意味です」

「食べるだけなのにな?」

「言えそれだけじゃなく暗殺を得意とする人たちを倒すだけで人間

を食べようとする人たちには豚や牛で我慢してもらってます」

『準備できたか？』

『出来たよ父さん、海斗さん』

『なら行くぞ巽』

「巽さんこの人は？」

とエリオの質問に

「この人は僕のおじさんでウルトラマンアグル、父さんはウルトラマンティガ」

『待て、巽』

『未樹来たんだ』

その人物が映った瞬間、部屋の空気の温度が下がった気がするが無視して巽はやっと、リモコンを捕まえた

『あつ帰りに、アムイ〜ポン酢買ってきて』

『後、鶏肉をお願いね海斗』

『それってレイピークの肉じゃダメ？』

『当り前にダメだろ』

「あんな会話普通なの？」

とフェイトに言われた巽は

「環境ですから……」

『後、巽無理しなくていいんだからね』

『大丈夫、何時までも凹んでいたら、未有希が天国で泣いちゃうからね』

『帰ったら、巽復活おめでとうパーティだな』

『そうしたら帰りにケーキもお願いね』

「何という非平凡世界の会話……」

とはやてに言われ

巽は照れながら

「これがウルトラ族の会話です」

「ってことは巽のお母さんもウルトラマン？」

「いえ、母さんは闇の巨人のカミィラ、海斗さんの奥さんは同じく闇の巨人ハデス」

「闇の巨人!？」

「ええ、闇と光なんて紙一重ですよ、光の者が闇に染まったり、闇

の者が光になつたり・・・」

「へえ〜っで、未有希って誰？」

とスバルが聞いてはいけないことを聞いてしまい

「わっ、バカ！」

ティアナが口をふさぐ

「未有希は、僕の彼女かな？ だけど僕を庇って死んだ・・・」

と巽は少し暗くなりながら言った

「ごめん巽」

「嫌いいんだ、何時までも立ち止まってちゃ先には進めないからさ」

といつもの笑顔に戻りそう言い、その後はいつもと同じように説明をした

が途中で上空に怪獣のような反応が出たと知らせがあり巽だけが一時抜けた

「巽君も大変だね、こっちの世界にやっとなれたのに」

「巽さんしか怪獣を倒せないですから」

「なあさっきの続きが気になる奴いるか？」

まあ子供達+ というよりか全員は手を挙げていた

その頃巽は空中で怪獣と思われるものを発見したそれは火山怪鳥バードンだった

「なんでバードンが!?!」

「キエエエエエエ!?!」

バードンはダイナを見つけると突進してくるがダイナは華麗に回避した。

「っち嘴にだけは当たらないようにしないと・・・」

ダイナはスピード勝負に出るためにミラクルタイプに変わりバードンの背中に急速降下キックを決めてバードンを

海面に叩きつけてレボリウムウェーブでブラックホールに送り倒し、六課への帰路についた

その頃、六課では巽達の映像を見ているメンバーは熱くなっていたその理由は巽達の戦いがクライマックスに突入したからだ

「父さんはボスを!?!」

「任された!?!」

「巽!伏せろ!?!」

「えっ?おわっ!?!」

巽の頭の上をフォトンクラッシュャーが通り巽の前に居たレイピーク

星人を

倒し、巽は地面を蹴り上昇しながらのソルジェント光線を打ち出し海斗は回転しながら相手を切り倒し海斗の後ろでは爆発が起きていた

『海斗さん、変身します?』

『そうだな、一気にやるぞ!!!』

『イエッサー』

『ダイナアアア!!!』

『アグルウウウ!!!』

「「「「「おおおつ!!!」」」」」

テレビの中の人たちに夢中になるメンバー達

そして、出演者の内一人が戦っている事は、忘れ去られているようだ

『巽!合体技行くぞ!!!』

『オリヤ!、分かりました』

青い光線!!アグルストリームとソルジェント光線が一つになり人の心を

潤すような青い色の光線となり敵を倒していく

そして、次の技のWドリルアタックで地上に出たアグル、ダイナはティガが円盤を追うのを妨害する、怪獣ベムスター、シーゴラスに攻撃を加えた

「あつ……ウルトラマンって他にも居るんですか？」

とエリオの質問に巽は

「ああ、たくさんいるよ、僕はその中でも訓練所で教官補佐の仕事
を任されたことあるよ」

「訓練所？」

「そう、そこは宇宙警備隊を目指すウルトラ戦士が集う場所でたく
さんのルーキーが居るけど、自分の体の事を気にせずに特訓して
いた戦士たちの大半は死んだりしてるから」

「ウルトラマンって死ぬんですか？」

と当然の質問をしてきたのはキャロだった

「そりゃね、だから無理している人を見つけたら、きちんと叱れよ」

「それじゃ時間も時間なんで今日は終了で」

その後巽は、デバイスの手入れをし、そしてバードンの火炎放射を
くらった箇所を確認した

「なんかひりひりすると思ったらこういうわけね……」

軽いやけどを負っていたが巽はその部分に手を当てるとやけどは消
えた

が巽の疲れは増した

(この技って完成してなかったけ？おかしいな？)

その後異はベッドに倒れこむようにして眠った

「疑問」

皆に勉強会として、映像を見させたけど分かってくれたかな？
しかし、怪獣は倒れるたびに光になって消えるのは
相手がバトルナイザーの怪獣としか判断できないが
まさか……

Story 6 「疑問」

「なあ、最近、異悩んでないか？」

「そうですねこの前なんか考えごとに夢中でドアに命中してました
し」

「でも、困ってる人見つけると手伝ってたよ」

と話している最中に異はうわの空で食堂にやってきて
そのまま、食事を注文してもらい席について食べ始めたが途中で止まる

「この世界にバトルナイザーだけあったとしたら……まさかギ
ガバトルナイザー？ いやそんなはずない、あれは零人さんがへし折
つたはず……」

と考えているところに、スバル、エリオが山盛りの料理を持ってや
ってきた

が異は気付かない

「異くってあれ？」

「異さん」

「あつごめん、考えごとしてた」

「考えごと？」

「ああ、この世界で怪獣を倒している時にさ、違和感を覚えて」

「違和感？」

「怪獣が爆発する時さ、光の粒のように消えたからさ、それがね」

「元の世界じゃ違うの？」

「ああ、エリオは耳塞いどいてね……」

エリオが耳を塞いだのを確認し

念話でスバルに

『生物を爆発させる感じだからさ……でこっちの怪獣の爆発は
なんか

操られた怪獣っぽいんだよね』

『ってことは裏には何かいるの？』

『多分、有力線上はジェイル・スカリエッティだろうね』

『なんで分かるの？』

『勘だけど、レリック反応がある所に怪獣とガジェットが出てるだ

る?』

「でも前の怪獣は?」

「あれは僕の空中戦のデータ採集だと思っつてお前もなんか考えよとか?」

「うん……」

「僕でいいなら話きくよ」

「ありがとう」

普通の会話風景だが外野から見ると中の良いカップルに見えているように

「なんか……」

とティアナが言いかけたが何かの感情でせき止められた

所戻って、巽のお悩み相談室(仮)では

「つまり、ティアナが俺の講座を聞いても無理をやめないと……」

「はいそうなんです、それでとても心配で」

「どこのお悩み相談室ですか?」

「まあな……」

巽は軽く怒っていただが、呆れたとも感想があつた
しかし、巽にはこれとほぼ同じ内容の出来事を体験しているそして、
この先の出来事も簡単に予想できた

「よし、今度現場差し押さえだ！」

「おう！」

「あつもちろんエリオもな」

「巻き込まれた!？」

「じゃ、また今度」

その後巽は六課、管理局のデータベースにバトルナイザー、ギガバ
トルナイザー

さらにバトルナイザーネオがないか確認した
それに該当するのが一人だった

「やはりか……ジエイル・スカリエツティなぜ、バトルナイ
ザーをしかも

この映像から見るにレイオニクスを登録しやがって」

バトルナイザーはそれを操るレイオニクスが必要で

一個のバトルナイザーには3体の怪獣、宇宙人が登録可能で、さら
に操ることができる

最強の兵器である

「考えても仕方ないか」

『巽』

「おわっ!?!?つてあ~~~~~」

椅子から転げ落ち頭を壮大に撃った

『つたああ、分かった今行く』

そして巽（説教担当？）現場到着

「ヴァイスさんですか？」

「ああ、」

「なるほどね、確かに自分の体の限界超えそうだな・・・」

「って巽そのたんごぶ大丈夫？」

「お前のせいだろうが」

と巽がティアナに話しかける

「ほいよ、ティアナ」

「えっ」

「ティアナ、そんな風で体痛めてない？」

「.....」

そうきますかという顔になった巽は

「前に無理するなって言ったよね？まあ確認は取らないけどなぜ話したかを聞いてほしい」

「なんで私に」

「残りのやつらが不安だから」といい話を続けた

それは巽が15の時の話だ

場所はM78星雲ウルトラの星

巽は、そこで仲の良かったウルトラ戦士とともに訓練していた

「ダイナお前もなかなかだな」

「そうだねティード」

「まったくお前は何で息切れしてんだよ」

「はっはっ……撃ちすぎた」

と巽はウルトラの星ではウルトラマンティードと仲が良く兄のよう
にしゃべっていた

ウルトラマンティードは特に目立った能力は無く、ただ兄弟思いの
良い戦士だった

「ダイナ、今日も寄ってくか？」

「あっありがとう何時も悪いね」

「いや妹達が会いたがってさ」

「分かったよ」

その後ティーダと一緒に街を歩いていたら警報が鳴り空を見上げると円盤群が攻撃を加えてきていたのだった

「あいつらはテンペラー星人か!!」

テンペラーは当時よく攻撃を加えてきた、しかし今回はグランドキングを引き連れてやってきた

「ティーダここは避難活動を優先させよう」

「いや、俺が戦ってくる」

「まで、今の君の状態じゃ死に行くようなものだ」

「ダイナ、悪いが後を任せませ」

「待て、そんな体では!!」

ダイナの静止を振り切り空の敵を倒すために飛んで行ったティーダはグランドキングに体当たりを加え何処かへ飛んで行った

「巽!今飛んでいったのは?」

「タロウ教官!ティーダが今グランドキングに!!」

「何だつて！？巽今すぐ応援に行け俺も後から行く」

「分かりました」

ダイナがたどり着いたところにはティーダのカラータイマーは点滅しており

グランドキングに踏まれていた

「セイヤア！！」

ダイナの蹴りが相手の顔面に直撃し、相手は地面に倒れこみダイナはティーダに近寄った

「ティーダ大丈夫か」

「んなわけなーだろ、ただめまいがして撃たれただけだ」

「お前体に負荷ってか無理しすぎだよ」

「ああ、そうだな」

「後は僕に任せて」

ダイナはそう言いとスペシウム光線を撃ちながら走っていきパンチを決めるティーダも続きとび蹴りを決め二人の同時キックが相手突き飛ばす

「ティーダいけるか？」

「ああ、Wスペシウム光線だ！」

二人の光線は確実にダメージを与えただけで倒してはいない、

「つつ悪いさっきの攻撃のせいでエネルギーを……」

「いや僕もエネルギーがまずいからね」

両者のカラータイマーは激しく点滅していた

そこへグランディングの光線が飛んできたが

ティーダは動けるはずだったのに動けずに当たってしまいその場に膝をつく

「ティーダ!!! 貴様!!!」

しかしダイナも攻撃をくらい地面に墜落すし踏みつけられる

がそこへ赤いマントを着た赤き戦士、ウルトラマンタロウがやってきて

ダイナを助けた

ダイナは怒りのソルジェント光線で倒したが

そのときすでに兄と慕っていた人物は死んでいた

場所は現代に戻り

巽は友人の死を語っていた

「その後、あいつの妹達に謝りに行ったらあいつらは大泣きで泣きやまずのが大変だった」

「・・・・・・・・・・そう」

「けどなあいつの葬式の際に『役立たず』といったやつがいてそいつは俺とタロウ教官が怒ってそいつを牢獄送りにしちゃったけどな」

「えっ・・・・・・・・」

「俺達、ウルトラ戦士は絆を大切にしているんだ、だからそんなこと言っちゃつは牢獄行きに・・・・・・・・」

そう告げた巽は立ち上がり

「まあ長くなっちゃったが俺の言いたいことは無理すると死ぬか、仲間が傷つくって事だ」

「・・・・・・・・・・」

その後巽はスバル達と合流したが
ヴァイス、スバルがなぜか泣いていた

「なんで？」

その後巽はバイクのメンテナンスを手伝うために移動したが
そこにはなんと、巽が愛用していた戦闘機
スペリオルが置いてあったのだった

「ヴァイスさんあれは……」

「あれか、お前がここに来た時に見つけたんだ」

「ってことは」

「巽？」

巽は歩み寄りコックピットに乗り込んで
パネルを動かした

『巽久しぶりです』

「パルって事は俺の機体か」

『はい、一緒にブラックホールに吸い込まれました』

「よしこれで、怪獣に苦戦しなくてもいいかも」

「よかったな巽」

「はい！」

巽は嬉しそうな笑顔でいたが
武装の事ではやて達に説教された（笑）

「なんで換装作業は俺だけでやるの？」

巽の悲鳴は誰も聞かなかった

「護る異」(前書き)

電腦魔人デスフェイサ

登場

「護る異」

この世界の異変はブルトンだけではなくバトルナイザーまでからんでいた

しかし、何か裏に居そうな気がする。

後なんか別の問題も起きそうな気がするのが引つかかる……

Story7「護る異」

今日の訓練は

それぞれの部隊長に挑むらしいが

異はこの隊にも所属してないがなのはが確認を取り
スターズに所属になった

「今回は高町隊長を撃破すればいいの？」

「撃破じゃなくて撃墜ね」

「いつもの癖です……」

まあ前半のおさらいの模擬戦と思っていた異だったがこの後の事が
トラウマ第5個目となるのだった

ティアナの一撃を放ったのを見た異は後ろに下がり

異変を感じたが気のせいだと解釈し、

魔力をチャージし始めたがこの戦法はまずいと判断した

瞬間ウイングロードに飛び乗り走っていくが

その時スバルは拘束されティアナに砲身が向けられていた

「ライトニングバレット!!」

「何?」

ティアナに向けて飛んで行った魔力弾をすべて撃ち落とし
注意をこちらに向ける

「俺の事お忘れで?」

と言うと魔力弾を連射し、空に飛びあがり
スペリオルをソードフォームに切り替えた

『sword foam』

「今の音はどっかでッ来たことあるな」

と言いながらも巽は真剣で指示を出した

「ティアナ何時までも止まってんな! スバルは引きちぎれるか?」

「無理」

「OK、ティアナさっきの刃で何とかしといて、その間俺が引きつ
けとく」

巽は分身技でかく乱し、攻撃を通さないようにして

「まだか?これ以上はきつい!!」

巽は攻撃を受け止めたり防いでいるのでダメージが溜まっており

巽自身、消費が激しいがここでスバル達が戦線復帰し

『よし、俺が杖を奪い、スバルがダメージを負わせとどめにティアナがつてどうよ、あとティアアナ後で話（説教）がある』

『了解』

巽は煙幕を利用し隠れ、ビルの後ろに隠れ息を整え再度接近する

「オリヤアアアアアってあれ？」

巽は切り込むがあっさりかわされたがそれは幻影で本体はその後ろから切りかかるが先にレイジングハートにはれ回避される

「っち、ミスった」

「後は任せて！」

巽の次にスバルが飛び込み一瞬隙を作り巽がそこを蹴り上げレイジングハートは空に舞い、そこへティアナのデバイスクロス・ミラージュからの閃光が空を駆け命中する

その後食堂にて

「大丈夫？あんなこと言つて？」

「いや、おごるって言っちゃまったからねっつてか盛るねっ」

勝ったスバル、ティアナに飯をおごると言いきった巽だったがスバルの食べる量を忘れていた

「ありがとう、巽」

「すごくうれしそうだな」

「だっておごりなんでしょ」

「遠慮を知らなさいバカスバル」

とツッコミ担当は張り切っている

しかし、奢る相手が2人だけではなくなぜか5人分となった

「あれえ〜なんで俺払いになってんすか部隊長達！」

「いや〜たまにはね〜」

「……………まあたまにはいいですよね」

と言った後会計し、

自室に戻るうとした矢先、山岳地帯にて謎のロボットが稼働し、暴れ始めていると通報を受け

現場に向かうとそこにはかつて、

巽の世界でセブン、ティガをピンチに陥れた電腦魔人デスフェイサーだった

「あれはデスフェイサー!!!」

巽は驚き、変身道具のリーフラッシュャーを構え、

険しい表情に変わり

「すいませんが、皆さんはバトルナイザー使用者を探してください、あの怪獣はタダものではなく俺でも死にかけるかもしれませんがバトルナイザー使用者を倒せば正気はあります」

そう言いきると変身し

デスフェイサーの前に巨大化した

「シュワッ！」

ダイナはデスフェイサーに殴りかかるが両手で防がれ、右キックも繰り出すが相手の銃のような左腕で跳ね返されチョップを繰り出すが鉄のような右腕で抑えられ、相手のパンチをくらい投げ飛ばされる

「グワアアア!?!」

ダイナは地面に叩き付けられ、立ち上がるうとしたところにデスフェイサーの左腕のガトリングガンからの銃弾がダイナの周りに当たり炎を上げる

「セヤッ！」

ダイナはミラクルタイプに変わりローリングゲアタックを決めようとするが

かわされるも太陽を背にシャイニングジャッジを繰り出す

決まった!とだれしも思うがデスフェイサーはジェノミラーで阻み、反射した

ダイナはローリングしながら回避したがその回避した場所にデスフ
エイサーの伸縮自在な右腕デスシザーが待ち構えていた

「ゼワアツ？」

ダイナの首に食らいつきデスフェイサーの所まで一瞬のうちに
引きよせられた

「なんで、ダイナの動きが正確にわかるんや？」

ダイナはその後地面にまた叩き付けられ、カラータイマーが点滅し
始めた

その時、デスフェイサーが上昇し胸のところが開き、ネオマキシマ
砲が出てきて

チャージをし始めて、撃とうとしていた

ダイナはレボリウムウェーブを発射したが相手の攻撃を何とか吸い
込んだ

がそれと同時にダイナは膝をついたが相手は消えたのだった

「・・・消えた・・・だと？」

ダイナは、その後塵気楼のごとく消えた

そして巽は、首から少し血を流していたが何とか止血し
傷口を消した

「巽！」

「スバルか、バトルナイザーは？」

「見つかなかったってちょっとこっち来て」

「えっ？」

「ほら、血が出てるよ」

「あ、ありがとう」

「なにいちやついてんの？」

とティアナに言われたが巽は

「応急処置してもらったただだよ」

と言うが巽の腕には血が流れた跡や銃で撃たれた跡があつたが
いずれも止血済みだった

「………ねえ、今度はあいつに勝てるの？」

「それってどういう事だい？」

「だって動きが完全に読まれたたし、攻撃も効かないみたいだし」

「それがどうしたの？次は勝つから大丈夫」

「絶対勝てるの？」

「分かんないけど勝つ」

と言いつつ六課に戻ったが書類整理がありその後、ティアナに説教をした

話が長い内容だけで言うと

仲間とは何か

仲間の大切さ

仲間を捨て駒のような扱いをしない

後、援護うまいぞと言葉を添えたが

巽は自室でデスフェイサー対策を練っていた

デスフェイサーには今までの技は通用しないと考え

ストロングで行くか、ネイチャーコントロールアタックを使うために

ミラクルか考えてたがパワーで負ける可能性があるためミラクルは没

「くるる〜」

「フリード?どした」

「紙?」

紙には傷薬、ガーゼ、包帯と書いてあった

「一体何があつたの?周りには黙っておくから」

と後をついていく巽だった

そしてなんかあやしそうであやしくない空気を出した部屋にたどり着いた

「空き部屋?まあいいか、ノックして、もしも〜し」

部屋に入ると黄色い何かが飛びついてきたが巽は後ろに後退しそれを飛び越えた

「ムーキット？怪我してるのかって噛みつくな！」

「パムパム！！」

「きゅるる〜」

「リトラ！リムモードで説得して」

「キエエエ！」

その後3分後おさまり、治療したあとムーキットを連れて移動して、スペリオルの整備をしていたがそこへ連絡が入り画面を出すと

「なんやその巽と愉快な仲間たちは？」

「え、え〜っと気にしないでください、ガジェットですか？それならこいつを使いたいんですけど」

「ええよ」

「よっしゃ！！きた！！ハネジロー、フリード、リトラ、機体から離れてな」

と通信を切り、スペリオルを外に出しエンジンを駆けてその場で上昇そしてエンジンに火をつけて

「部隊長、出撃しますー！」

「了解」

「巽、スペリオル出撃します」

スペリオルは空に飛びガジェットを発見し、

「操縦は前と変わらず、ただ武器の性能か」

と言いながらも撃墜していき帰還し
武器の問題点を直していた

「これで軌道修正完了、あとスパークボンバーのやつか」

とキーボードを恐ろしいスピードで打ちこんでいく
がハネジローが何かから逃げてきた

「まっつて〜そこの黄色いの〜」

「ん？スバルか、ってハネジロー？リトラ？ちょっと待てこっち
に来るなUターンしろ！！」

ドンッ、ガンッつと音を立てて巽にぶつかり巽はコックピットから
落ちて

地面に頭をぶつけ、ダイナに変身した

「お前らここで倒そうか……」

腕を十字に組み替すと後ろに居たスバル、スバルを追ってきたティ
アナ、ウィータ
までも固まる

「休日と再戦 前篇」

デスフェイサーの戦いの後、俺は対策を練っていたがムーキット、リトラの騒ぎで……

まあ良いとしよう、しかしデスフェイサーを攻略しないと……

story8「休日と再戦 前篇」

朝の訓練&模擬戦って慣れない〜っと思いつながらも何とか終わり

(隊長陣は巽を先に倒したかったようで集中攻撃していたというFW5人そろって隊長陣の話を聞いていた)

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了お疲れ様」

というなのには対し巽は

(いやどう考えても一人狙いでしたよね、もうウルトラマジック等は使わないって言いましたよ)

と思っていた、

「実は何気に今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど」

「なんですと!?!」

となのは隊長の言葉にツッコミを入れた巽がボリュームが小さかった

「どつでした」

と振り返るなのは隊長にフェイトさんが答えるが

「合格」

「」「速っ!?!」「」

即答ぶりにFW年長組が驚きながらもツツコミを入れた

「まう、こんだけみっちりやって、問題あるようなら大変だったことだってこつた」

まあそうだと皆思ったようである

「私もみんないい線いってると思うし、じゃあこれにて二段階終了
「やった」

とみんな喜びスバルは思いつきり巽を叩く

「おわっ!?!」

「ダイナモスバルには勝てないの?」

「不意打ちだからだろーが!」

「後、デバイスリミッターも一段解除するから後でシャーリーの所へ行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すつからな」

「……はい」「……」 「明日？」

と4対1で声が割れた
それは巽だった

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日は私達も隊社で待機する予定だし」

「皆も入隊日からずっと、訓練ずけだったしね」

その言葉に皆戸惑いを隠せてないというよりも
と思ってるうちに巽がスリープモードに

「まっそんなわけで」

「皆お休みですって巽君？」

「起きてますよ」

その後巽は私服に着替え、スペリオルに格納していたはずの物を探
していた

それはトライチェイサーの改良型GUTSチェイサーだった

「あっヴァイスさん出かけるんですか？」

「いや出かけるのは俺じゃないがバイクを貸すだけだ」

「なるほどね……」

「そっちはお前のか？」

「はい、こいつが飛べなくなった時よりの足です」

「お前の居たSUPERGUTSだっけ？よく考えてるな」

「いえ、これは俺のアイデアで色々助かってます」

と言いながら、バイクを押し、最終点検を終えて
走らせようとしたが

「ヘルメット忘れてるぞ！」

「あっいけね〜」

とスペリオルからバイク用のヘルメットを出してきて
かぶり

「よし、財布持ったし、更新したしOK」

と不意にカード一枚はいる隙間を発見しスペリオルを装填した

「カラーリングチェンジ、赤から白へ変更」

『OK』

変更完了し出かけようとするが
立ち止まる、道は知っているが

(行く場がゲーセンしかない・・・あつコーヒー豆買わないと・・・)

コーヒー豆をブレンドしている巽のコーヒーは相変わらず美味いらしく

六課でも人気で消費が激しいのだった

(業務用を買うか)

と思いながらも出かけた

「コーヒー屋は確か」

とたどり着いた

そして中に入り

「おやっさん、いつものある？」

「巽かい、あるよ何時も道理の業務用をね、しかし君のブレンドしたコーヒーは売れ行きがいいよ」

「ありがとうございます」

「はい、また配送かい？」

「はいお願いします」

と買い物済ませた巽はそのまま、バイクを走らせたそして、

食料やお菓子の原材料も買い一旦六課に戻り

荷物を置き、ツーリングに(ワープ使用のため時間はたったの1分)

そして巽は、気ままに走ったが
途中でバイクを止めて

街を歩くことにしたがそこにはアイスを頬張る、いつものメンツの
2人がいた

巽はそれを確認するとUターンした、そして

(今日はのんびりできるのか)

と屈伸したが後ろから何かに捕まった

「巽くなにしてるの？」

「スバル、何ですかい？」

と巽を捕まえたのはスバルだった

巽は一瞬姿を消し再びスバルの後ろに現れた

「ったく、いきなり捕まえるんじゃないよ」

と叱る巽は、何時になく軽くそこまで怒らずに
スバルの頭をポンと叩き

「俺は、ちよつと買い物があるんでな」

と言い残しバイクにまたがり、移動したがその途中で
休暇返上を告げる通信が

『OK、スターズ05了解』

レリックケースをぶら下げた少女が、エリキャロたちに保護されたらしいが

もうひとつ、ついてたらしい跡があったという

巽はエンジンフルスロットルで現場に向かった

「変な買い物させる親がいるもんだな」

と愚痴をこぼしバイクを現場周辺に止めてスペリオルを抜き取り、バイクは転送した

巽はその少女に向けて緑色の光線を放った

「エリオ、キャロー応回復光線を今打った」

「分かりました」

「ってかお二人はデートだったのか？」

巽は二人の格好を見てそう言ったら、二人は顔を赤くした

（まじかい）

「まあ後はスバル達が合流するのを待つだけだな」

とっていると合流し、その少女をシャマルに任せFWは下水道に入る

「巽はこのにおい平気なの？」

「まあ、よくこんなところで戦ってたからね」

「そうね……レイピーク星人だっけ？確かその時も」

「そうだね……」

と歩いて行くこととなったが、異は前回引き分けた怪獣が出てくる
と悟った。

しかし、次は絶対に勝てるという確証があった

「休日と再戦 前篇」（後書き）

（次回予告）

レリックを探索する巽達の前に3人の刺客が現れ、戦闘を開始するが同じころ地上にデスフェイス が現れる、巽はこの状況をどうするか？

デスフェイス を倒すことができるのか？

次回をお楽しみに

「休暇と再戦 後篇」

二段階終了記念に、休暇を貰った俺たちだったが
レリックケースを身に付けた謎の少女が発見され、休暇は返上
俺たちは今、残りのレリックを探すために動いている

Story「休暇と再戦 後篇」

指示されたところへ走るFW達、地上でもガジェットによる攻撃が
起きたようで
巽達は急いでいた、その途中でスバルが人造魔導士について説明し
ていた

「つたく、どの世界にもクローンがいるもんだな」

「巽の世界にも？」

「ああ、俺のところは、怪獣だけだな」

「そういうのって倒しちゃうんですか？」

「いや、保護しているよ、何にせよ生まれてきた命だ、命はみな平
等、好きなことができるようにしてるよ」

と巽がエリオの質問に答えた後

「来ます、小型ガジェット6機！」

その言葉を聞いた巽は腕を構え、

何時でも光線を打てる状態になっていたがスペリオルの事を思い出
し、

持ち替え、ソードフォームに切り替え攻撃を開始したが

「バリアなんてな気合いで壊せるんだよ!!」

と言いながらバリアを紙のごとき切りそのまま倒し、
振り返るとエリオの後ろにガジェットが迫っていた

「エリオ伏せる!」

「はい!」

と答えた直後にエリオは伏せて、スペリオルから銃弾が発射され
ガジェットは爆発した

その後は一人一機の割合で倒していった

「空も大変そうだな〜こりゃ」

「なら巽が変身して潰せば?」

「ウルトラマンが蚊を叩くような感じだから逆に面倒」

「だよ〜」

とティアナが珍しくぼけたために巽は

「なぜ聞いた!??ってキャロ目的地は?」

「ケースの推定位置までもうすぐです」

と確認を取った後、

爆発が起こり、皆武器を構えたが巽は冷静に判断した

「大丈夫、味方だ」

と煙がはれると、長髪の女性が立っていた

「ギン姉」

「ギンガさん」

そのギンガという女性は

「一緒にケースを探しましょう、ここまでのガジェットはほとんど叩いてきたと思うから」

(さすが姉妹つと言ったところ?)

とりあえず、エリオたちとともに敬礼をした巽だった

その後、道を進んでいくと

「敵さんは団体客かよ」

と愚痴りながらも倒していく巽
そして周りを確認して、

(よっし誰もいない……光線打てる!)

「ダイナスラッシュ！」

巽は丸のこ状の光線を放ち相手を全滅させた
その後合流したが

「ねえ、光線使ったでしょ？」

「な、何のことでしょう？」

とティアナにはれる始末だった

その後何とかキャラコがケースを見つけたが
何か物すごいスピードで地面をけるような音が響き

巽は即座に動いたが相手は光学迷彩を使っているのか見えないが
飛び上がりけりを入れるが足を掴まれ地面にたたき付けられ、
攻撃を通してしまい、エリオが切りかかるも回避された

「エリオこいつは任せろ、お前はケースの護衛に付け！」

と言うと巽は相手に再度殴りかかった
がケースは紫の髪の少女が持ちその魔法でキャラコが飛ばされ、エリ
オを巻き込み
壁に凹みを作った。

巽の攻撃を回避する2足歩行で尻尾があり鎧を着けた怪人に対し
スバルがとび蹴りを入れるが回避され、ギンガの左パンチを受け止
めた相手は
その威力のせいか後ろに後退する

「ギンガさん、行きますよ！」

「ええ」

巽とギンガのダブルパンチが決まり相手は壁にめり込むが相手は静止していなかった

「あいつタフだな」

「つて止まらない、巽君！」

「！っ、耳と目え塞げ！！皆！！」

と巽の指示に驚くがその後皆指示に従った

激しい光と騒音がその場に響いた

「スタングレネードかよ！！」

と叫んだ巽はその後立ち上がり、

爆音を発生させた犯人を見つけたが火炎弾のようなものを浴びかける

「っ煙幕？」

その煙幕からさっきのでか物が出てきたので巽は足に炎を纏わせけりを入れた

「イエエエアアア！！！！」

と激しくぶつかり合いギンガも加わりお互い弾き飛ばされる

「ギンガさん大丈夫ですかい？」

巽はギンガを支えた、その後

巽は再度、構えるがヴィータのハンマーが相手に決まる

「いつ見てもすごいな」

と感想を述べていると地震が起こり、崩れかけ始めるが巽は柱のような光を出現させ

「皆、地上へ出る！！」

と叫び地上に出るとそこには、巽が引き分けた相手

デスフェイサーが出現し、ヴァイスの操るヘリに狙いを定めていた

「巽君行って！」

「えっ？どういう事？」

「あなたがダイナって事はスバルから聞いたから速く行って」

「わかった！（スバル後で覚えてるよ）」

巽はリーフラッシャーを取り出し、空に向けて変身した

ダイナはストロングの姿でデスフェイサーの背中を持ち上げた

そのおかげでヘリにデスシザーレイが当たることなくその上を通過した

『なのはさんはへりにまだ付いていてください!』

『えっ、解った』

と念話で指示した

ダイナはデスフェイサーをビルの合間に落とした

「デエアアア」

とダイナは相手に向かって走るそして相手の胴体に蹴りを決め

組み合いになりダイナが押されるが今度はダイナが相手を押し始める

「ジエアアア!!!」

と叫び、ダイナは相手の腕をもぎ取り蹴り飛ばし、

そしてそのまま相手に接近したが相手はネオマキシマ砲を出していた

「ここで使うのかよ!!」

ここでネオマキシマ砲を使えば死者が大量に、被害も激しく人が住めなくなる可能性もある、そして異自身死ぬかもしれないがなぜだが自然に体が動き、相手のネオマキシマ砲を貫いた

(これが父さんの言っていた、何のために戦うのかっていう質問の答え、

この世界に居る人たちや、いつも一緒に居る仲間を守ること)

と思いつながらダイナは相手をダイナスペースダイナマイトで空に投げ飛ばし

ガルナイトボンバーで貫き倒した

がそこへダイナに向け、話しかけてくる者がいた

『へえ、あんなに苦戦してたのに倒しちゃうんだ』

『誰だ！貴様』

『貴方の言う、怪獣使いよ』

『なぜ貴様は怪獣を使う』

『貴方が邪魔だから、これで、遊んでね』

『どうということだ』

とその会話の後、光が二つダイナの目の前に出現し
その光は人の形をした

一人はサーベルの持ち主、マグマ星人、そしてもう一人はかつて
ブラックキングと言う怪獣とともにウルトラマンジャックを倒した
暗殺宇宙人ナツクル星人だ

「主の願いだ、貴様を殺す」

「人を殺せるぜえええ！！」

とナツクルの言葉は忠実だが、マグマは殺人鬼だ

ダイナはストロングからフラッシュにチェンジし

怪人二人に立ち向かう、

ダイナは二人にとび蹴りを決めた後空に飛び上がった

それは街に被害を出さないためと空中ではマグマ、ナツクルの戦力が落ちると判断したためだ

「フン、空中戦かなるほどいいだろ」

「お前は空かあなら俺は人間どもを殺すぜえ!!」

「しまった!行けえモスラ、ウイングダム!」

ダイナは二つのカプセルを投げ、その中から幼虫のモスラと全身銀色の怪獣ウイングダムが現れ、マグマを止める

「何だ貴様ら!!!!」

とマグマはウイングダムに切りかかるがモスラのブチレールガンで弾き飛ばされる

その頃、空中ではダイナがナツクルとの戦いが激しさを増していたダイナはナツクルの腹をけり、その勢いでソルジェント光線を撃とうとしたが

相手の背には地上、外せば被害が出てしまうし、何より味方に当たるのが怖い

「どうやら、君は非力な人達の事が気になってしょうがないようですが戦いで気をそらす事は死につながりますよ!!」

とナツクルの攻撃がダイナに決まり、ダイナは地上に落下するがそれをチャンスとしたダイナはソルジェント光線を打ち込みナツクルは倒したが

マグマのサーベル光線を受け、地面に倒れこむ

「ウイングダム、モスラ、やつの動きを止める！」

「ガピーガ！」

「キユイー！」

モスラの糸が相手の右腕を本体と糸で捕らえ

ウイングダムのレーザーショットが相手の足や体に当たり動きを止める
ダイナのカラータイマーは点滅していたが、ソルジェント光線を撃ち
相手の頭に当たるが突然、相手は消えてしまう
ダイナは塵気楼のごとくその場から消えた

その後巽は、FW達と合流したが

デスフェイサー戦で右腕を酷使したため腫れている

「暗くてよく見えなかったけど、アタッシュケースと変わらないな」

と持ち上げた瞬間、ギンガが巽に忍び寄る者を発見し、
巽に注意を出した

「巽君！」

「はい？っつ！？」

その矢先、巽の左腕から鮮血が吹き出したが巽は相手の腕をつかみ
自分の方に寄せた

「かわいいくせにそういうことしちゃ〜もったいないぞ」

「うっせー」

と相手が言うのと巽はケースを取り上げようとしたが別の攻撃を受け、放してしまう

「しまった」

「巽、何やってんだ！」

「そうです、速く取らないからです!」

「すみませんでした!」

とヴィータ、ラインに責められるがティアナ達が何か隠していた

「あ、あの……」

「なんだ!?!」

「実はレリックはここに……」

「……はあ?」「」「」

と3人は驚き、ティアナの説明を聞き、キャロの帽子の中にレリック本体があったが巽は、無駄に怒られた……

『あの時の声は女性の物だった、バトルナイザーは俺が来る前にあつたはず、
だとすると元々仕組まれていたのか？』

とかんがえながら巽は夕食を食べずに寝た

「時には変身しなくてもいいよね?」

何とかレリックを確保し、デスフェイサー、ナックルを倒したが
まだ謎が残る、写真だとバトルナイザーを所有しているのはジェイ
ルなのに

別の人間が適合者らしく、振り出しに戻った

story10「時には変身しなくてもいいよね?」

朝、起きるとなぜか床で睡眠してた巽は起きると
なぜかスバルがそこに居た

「なんでお前居るの?」

「いや、時間過ぎてるから」

「えっ?何だと!?!」

いつもの感じで朝連、モスラ達の健康管理等をしていると
ティアナに呼ばれて行くとなのはに女の子が張り付いて泣いていた

「ティアナ現状がよくわからない」

「相手をしようとしたら・・・」

「なるゝよくあるパターンだ」

「どうしたらいいのか解ります?」

とエリオの質問に巽はちよいと手を動かしウサギの人形を歩いて見せその女の子の前に歩かせるが巽のネタが尽きた……
がちょうど隊長2人がやってきた

「八神部隊長」

「フェイトさん」

「スバル、なんかいいネタない?」

「でんぐり返し?」

「なんでやねん!」

と念話で漫才をしているバカどもだったが
フェイトがウサギを捕まえようとしていることに気付き
驚いたように見せる

『巽君ひどいよ』

『いや違いますよ!驚いているだけですよウサギが』

『じゃあ、私の言葉に動きを合わせられる?』

『できますよ』

と巽が合図をすると

「くんには」

とフェイトが言うと、ウサギのぬいぐるみを巽がお辞儀するように動かし

女の子の注意をそらす

『巽うまいね〜』

『じつじつのはよくやらされたからね』

と念話で話しながらも動かす

その動きはウサギが困ってるように見せる

その間もフェイトの説得が続くが達人的なスキルの持ち主だと巽は判断した

『な、なんかフェイトさん達人的なオーラが』

『フェイトさん、まだ小さい甥っ子さんと姪っ子さんがいますし』

『使い魔さんも育ててますし』

『あ〜さらにあんたらのちっちゃい頃も知ってるわけだし』

『ってか巽、平気?』

『大丈夫、よく子供を泣き止ますためにやってるから』

『確か弟さん居たよね』

『後、従妹もいるし、孤児院の皆にも使った技だからね・・・』

『そろそろ、止まったら？』

『そうだね』

と動きを止めようとし、

フェイトのフォローの甲斐あって何とかばねずに済んだ

その後エリオ、キャロが面倒をみることとなり

異達は書類のかたづけとなったが異はいつもよりゆっくりだったが

「はい、おしまい」

「はやっ！？って異いつもより遅い？」

「まあね、仕事と言いながらもちよいと調べ物をしてたからね」

「スバルはもたもたしないで異に回しなさい」

「俺かよ！？ったくしかし、この青髪有能力使えるな」

「ねえ異ってこういう人が好みなの？」

「いや俺はどちらかと言うと・・・って何聞いてんだ！」

と異のデコピンがさく裂するがそのへ

『異君、ちょっと来てくれへん？』

『八神部隊長？今すぐですか？』

『そや』

『了解』

と返事をする。巽は立ち上がりウルトラトウインクルウェイを使い、その場から姿を消した。

「巽!？」

『仕事は終わってるから大丈夫』

とワープした所で巽は質問される。

「今の何や？」

「ワープの一種です、でご利用は？」

と巽は確認をし、初対面の人がいたので

「申し遅れました、機動六課スターズ分隊所属、古代巽です」

と言い質問を受けた

質問は「光の戦士と相対する闇の者、人の心を利用し、力を得る」と言う所だった

「光の戦士は多分ダイナつまり僕ですが、闇はいろんな解釈があります。」

まず人の心の闇、次に怪獣、宇宙人、最後に邪神です」

「邪神？」

「はい、僕の世界では、邪神との戦いが2、3度ありました、その時空は闇に覆われ

人々はその闇に恐れました、しかし、その時の光の巨人が自分の命と引き換えに倒しました」

「しかし後者だった場合は、君もその巨人と同じ運命をたどるのか」

「はい、父さんの用にはなれませんがそれと同等の事はします」

「わかった」

「すみませんが僕はまだ仕事が残っているので先に帰らせてもらいます」

と来た時と同じように姿を消した

「巽君のお父さんと同じ……」

「彼がダイナなのか、あんなに若いとわな」

その後仕事を再開した巽はかつて、自分の父親が戦ったように自分も戦えるのかと考えていた、

巽は頭を冷やすために外に出ていた

「ふう〜、闇との戦いか……」

「巽、どうしたの？」

「ああ、スバルがいやなんでも無い……」

「嘘、巽いつもよりも暗いよ」

「ばれたか……ちょっと怖気ず居ただけさ」

「巽も怖い物があるの？」

「ああ、父さんが命と引き換えに倒した邪神がこの世界にいるかもしれないと

思うとなんか力でなくて」

と語る巽の顔は真剣そのものだったがそれは
自分は手も足も出ずにただ護ることもできずに自分の父親の力にも
なれず

ただただ、父親が人々を守るために命を引き換えにし
力尽きるのをただ見ることしかできなかった自分にそれと同等の者
が倒せるのかと思っていたからだ

「巽、自分の言葉忘れてない？」

「何だ？」

「強い者は弱い物を心配させないために不安を隠しているっていう
言葉」

「ああ、思い出したよ」

「元気出してよ、怪獣は巽しかたたえられないんだからさ、私達じゃ倒せないから」

「……そんなことないよ、君達のおかげで勝てた戦いもある」と巽は言つがその心の中は不安しかなかった

（俺が負ければこの世界に対抗策は無く人々は死滅するのか？そうしたら、こいつも死ぬのか？もう知ってる人が死ぬのは嫌だ……）
「ただどあいつには手も足も出なかったのに俺が勝てるのか」

と思つてしていると足に何かぶつかった巽はそれを拾い上げる
そのボールを追つてヴィヴィオがやってきた

「ほいよ、あんまり遠くに投げんなよ」

「は〜い、ねえなんで泣きそつな顔になつてるの？」

「うそ？えつマジか？」

「うん、巽泣きそつ……」

「あれえ〜、おかしいなふつ切つたはずなのに？まあいつか、スバル戻ろつぜ」

と言つて歩こうとしたらヴィヴィオがボールを落とすそのボールはダイナと怪獣との戦いで生まれた穴に落ちそうになる
が巽は穴の寸前でボールを止めた

「ヴィヴィオ、今度は落とすなよ」

「は〜い」

「巽ってホントお兄さんだよな」

「そういうお前は、ヴィヴィオの姉さんか？」

「？ねえねえ、スバルお姉ちゃん、巽お兄ちゃん」

「「！？」」

いきなり言われどう動けばいいのかわからなくなる
巽とスバルは声を裏返していた

「「えつ、な、何かな？」」

「ダイナって、優しい？」

「優しいんじゃないか、俺みたいに」

「だって、巽がダイナじゃん」

「えっそうなの？」

「バカスバル！！」

「えっ酷いよ巽、叩くなんて！」

「そっだよ、巽お兄ちゃん」

巽にとって正体をばらされるのは最大の恥だったのが今でも残っていたように
スバルの頭を叩いてしまっただけでヴィヴィオにまで言われる始末
となった

「ごめん、正体ばらされるの慣れてなくて……あっ！お前ギン
ガさんにもばらしたろ」

「え、えつと、その〜ごめんなさい」（テヘツ）

巽は怒ろうとしたが力が抜けてしまい、自室に戻ろうと歩いた瞬間

「ねえ、いつものお菓子ある？」

「ああ、まだ作り置きがあるけど、まさか……」

「食べてもいいかな？」

「う〜んまだ19時前だからいいよ」

「やった〜ヴィヴィオも食べる？」

「うん」

巽は自室に戻ると、とりあえず対スバル、エリオ用お菓子詰め合わせを取り出し

テーブルの上に置き、糖分85%カットのジュースをグラスに注いだ

「ほいよ」

「「わい」「

まるで子どもみたいに喜ぶ二人（一人は子供だけでもう一人は考えよ
うね）

と言えずになごんでいたが次の日、ティアナが不機嫌だったらしい

「過去と新たな出会い？」

予言、それは当たることもあるし、外れることもあるしかし、
その中で邪神復活と書かれているのが気がかりで仕方ない
俺は邪神に手も足も出なかったのに

story11「過去と新たな出会い？」

巽は一人で昔の戦闘映像で肉親の死んだ戦い、邪神と光の巨人の戦いの映像だった。

それは巽にとってつらい思い出であるが、今後の事を思い見る事になった

それは巽がこの世界に来る2カ月前の事だった

その日は巽の姉の誕生日であった

しかしその映像を見ていたのは巽だけではなく、機動六課前線メンバーも同時刻に見ていたのだった

映像は空が闇に染まる時からはじまった

そして世界各地にゾイガーと呼ばれる羽を持った怪獣が現れ街を攻撃し始め、

巽を始めとするウルトラ戦士が世界各地で沿いがーと戦いを始めた

巽とその父親、古代アムイが任されたのはユーラシア大陸、アムイはモンゴル地域に飛来した個体と戦闘していた

ティガに変身した彼はゾイガーの片翼を破壊し地上戦に持ち込んでいた

がティガスカイタイプではパワーが足りずに打撃を決めても威力が弱いので

全身の色が赤く染まったパワータイプに切り替え、その個体を倒し自分の息子が戦っている、ルルイエと呼ばれる場所に飛んだ

その時巽は、ゾイガーを倒し終えていたが海底からアンモナイトを形取った

邪神ガタノゾーアが復活しダイナを攻撃し始めた

ダイナはゾイガーとの戦いでエネルギーを使いすぎたために反撃できずにダメージを受け続けていた

がそこに赤い光線がガタノゾーアに当たりダメージを与える

「立てるか巽」

「父さん、立てます」

と返事をするがすぐに膝をついてしまう

「お前は一旦帰れ！」

「大丈夫、まだ戦える」

と言い切りダイナはストロングタイプにチェンジし相手の殻を破壊しようとするが

相手の殻は固くストロングの拳でも破壊は出来ずにただ凹みを作っただけだった

そしてダイナは相手の大きな鋏で弾き飛ばされた

ティガはいつの間にかマルチタイプになっておりゼペリオン光線を

相手に打ち込み
相手を怯ませることに成功し

ダイナはすでに戦力との差に気付いてしまいただ攻撃を避けることと注意をそらすことしかできなくなったがダイナにガタノゾアの鍔が取り付き、
身動きが取れなくなってしまつがそこに青い剣が刺さりダイナは逃れることができたが同時にカラータイマーが消える

「海斗、悪いがそいつを頼む」

「しかし、そうしたらお前が」

「俺は元々闇との戦いで消えるはずの存在だったからな、今その使命全うしてやる！」

「まさかお前・・・」

「あいつらと子供達を頼んだ」

「待つて、！？バリア？」

ティガは自分とガタノゾアをバリアで包み、全身を光輝かせ
相手の体内に入り本来はグリッターティガではないと放てないはずの光線を放つがそれは自殺行為だった、グリッターの時ならまだしもマルチタイプでしかもカラータイマーが点滅している状態で打つならば

確実に死に至るものだった

そのバリアの外で必死にバリアの中に入りティガを助けようとしたがバリアが消えたときには空を覆っていた闇も、邪神も、ティガもない文字道理、跡形も無かった

というところで映像は終わった

「俺もあの技使えるのか……」

と考えていると警報が鳴り巽は何事かとブリーディングルームに向かおうとしたが

途中、窓から外を見るとすべてを把握した

そこには白く大きな繭玉、つまりモスラの繭だった

「やばっ……始末書書かされる！」

巽はUターンして、外に出てアンチバリアを張り一時的に隠す事に成功するが始末書の魔の手から逃れることはできなかった

次の日、六課に新メンバーがやってきた

巽は自分の武器のセカンドモード、大きな鉄槌を担いで集合場所に來ていた

が巽は新メンバーを見てこういった

「新人さんじゃないんだ……」

「なにその言い方？」

「いや別に」

「へえ〜ハンマーみたいなんだ〜」

「まあ破壊したいですし」

「ヒーローのセリフじゃないよねそれ」

「ですよね〜」

とギンガと会話していたが紹介コーナーを飛ばしてたらしくティアナに捕まった。

「あ、そつだ巽君、あの繭どうするの？」

「えっやはり見えますか？」

「「「うん」「」」

「やべえ、もうだめか・・・」

モスラの繭は巽の正体を知ってる者にしか見えない物となり、前線メンバーははっきりと見えてるらしくスバルはなんか繭に書いてたし

「ってことで仕切り直しTAKE2行ってみよう!」

と巽は手で合図をした。

がその後は新しいメンバーの紹介とスバルVSギンガの観戦後
何時も練習となったがシグナムがなぜか巽をしつこく狙う

「なんで!?!」

「いつぞやの借りを!?!」

「クラッシャーハンマー!?!」

巽の振り回したハンマーはシグナムをかすめたがそこには巽のトラ
ップがあった

「バインド!?!」

「待ってたぜ、誰かが掛かるのを!?!ライジングハンマー!?!」

この技は、バインドに捕まえた相手に対し最大の攻撃力を誇る技を
決める技

であるそのハンマーは電気を帯びて金色に輝きその光は目くらまし
にもなるがこれは

巽なりの配慮、トラウマを植え付けないためである

「っしゅ」

「オリアアア」

と安心した巽にヴィータがハンマーを振りかざしてきた

が巽のハンマーと衝突した

「くっ……」

その衝撃で二人は反対方向に飛ばされ、巽は樹木に激突する

「いてってって」

「大丈夫!？」

「ああ、なんとか」

「ならよかった」

と手を差し伸べるギンガの手を巽は掴み立ち上がり
デバイスを構え直し足にエネルギーを溜め走り出す

「雷光紅蓮蹴り!」

説明しよう、雷光紅蓮蹴りとは、右足に電気、左足に炎を纏った連続蹴りである

そして、その蹴りは殺傷設定なら、宇宙人2人を倒せる程度の威力がある

その攻撃は完全に相手を捕らえていたがその攻撃は外れ、
また木に突っ込むがそのまま反転しけりを打ち込みそして

空に飛びハンマーを空の上に居る二人に当てようとするが後方から
鈍い痛みを感じた

「ぎゃはあ!？」

「後ろがガラ空きだ!!」

「そいつは偽もんだ!!」

と巽はヴィータの後ろから姿を現し攻撃を加えるかと思うと
ヴィータの目の前で手を叩き猫だましを決めた

「にゃ？」

「おつと意外な声でした」

と言いつき残りダッシュで現状離脱し、ハンマーの柄を力いっぱい
握りしめ、相手に向かっていく

「スペリオル小型の分身を作れる？」

『OK、OFFCOURSE』

左腕に転送された小型スペリオルハンマーを巽は

「ハンマーブーメラン」

思いっきり投げつけるしかも2つ

そして相手、フェイトが回避したのを見てハンマーを振りかぶる
が外した

「ありゃ？」

「そこっ」

と鎌の刃が巽に当たりかけるがギンガの拳が先にフェイトのデバイス、バルディッシュに命中する

「サンキュー、後伏せてな」

「ハンマードリル!!」

「巽君が3人に見える」

ギンガを抱えて回転していたためギンガが目回していた巽はギンガを一旦地上に下ろし、顔の前に手をやり手を鳴らし

「その技ヴィータちゃんの」

「えっネタかぶり!?!」

と言いながらもフェイトを弾き飛ばすがなのはが押さえたそしてその後ろからもう一人のハンマー使いがやってきた

「ハンマートルネード」

巽は高速回転し竜巻を作りヴィータに大ダメージを与え、その回転を止めるが隊長陣はプロテクションで何とかしのいだようでヴィータが殴りかかってくるが巽は煙の中に身を隠した

「ギンガ平気か?」

めまいを取り除いた

「ギンガ大丈夫か？ごめんな回転に巻き込んでしまった」

「大丈夫、というより私が掴んだから・・・」

「そっかならちよつと下がってね」

巽は魔力を溜めた球体を作り出し、ハンマー形態から銃形態に変えたスペリオルは銃口に別の魔力を溜めていた。

「行くぜえ、ソルジェントストリーム」

その魔力のビームは空中に居る3人に煙がはれる前に発射し、そのビームはまるで金色のソルジェント光線だった。しかし、回避されたがそのビームは3つに分裂し相手を追いかける。そして、それぞれが逃げた先にはスバル達が待っていた。

「巽、ナイス誘い込み」

とスバルが言うのに対し巽は

「お前は止めを刺し損ねるよ」

「解ってる」

という感じなのだがスバルの方向にはヴィータが逃げていたがハンマーを構えている

巽は念のために空に上がった

だがビットのようなものの攻撃を受け、身動きが取れなくなる

「ちよ、えっ囲まれて動けないなこりゃ」

と手を動かすと攻撃を浴びる

巽でもこの状況は脱出不可でギンガが助けに来るが弾幕を張られて近づけない

「仕方ねえ、エクセルダツシュ」

テレポートのような技でその包囲網から脱出しようとしたが銃撃されまくりで巽は撃墜され、その後反省文と、始末書、モスラに関するデータを提出するために先に上がった

「巽って仕事熱心だね」

「ただダイナってことで私たちよりも多いだけよ」

「なんか大変そうねえ」

「それに僕達とも遊んでくれますし」

「後、フリードの相手にもなってください」

「クルル」

と巽に対しての感想等を行っている前線メンバーだった

その頃巽は書類を片付けていた、しかしモスラのデータとともに他の怪獣のデータも提示しなければならぬという命令もあり巽は頑

張っていた

「確かこの世界に現れたのは、サドラ、レッドキング、テレスドン、ズイグル？、バードン、デスフェイサー、マグマ星人、ナツクルの計8体そのうちマグマはまだ生きているが後一体別の怪獣がいてもおかしく無いっ」と

とPCに書き込み提出した後、装置の部品を買いに街に出たが暴走族が子供をバイクで轢いたのを目の前でみて子供に駆けより回復魔法を放ち何とか子供は死なずに済んだ

「坊主、大丈夫かい？」

「平気」

「よし、解った」

と言うと巽はバイクのエンジンをかけて、暴走族を追いかけた巽のバイクにはパトライトが付いているので周りは道をあけた

「そのこの暴走族、貴様らをひき逃げ容疑で逮捕する！！」

「捕まえてみるよ〜ザコ〜」

「俺たち全員捕まえられっか、バ〜カ」

その言葉で巽は犯人どもを捕まえるためにバイクの先に格納してあるネットトラップを使うために軍団の前に躍り出て、軍団に向けてトラップを打ち込んだ

「誰だっけ、全員捕まえて見るつったの？捕まえたぜ」

と言い残し、管理局に暴走族を渡し、さっきの子供に向かって走って行ったがそこにはきちんと母親の腕に抱かれる子供の姿があった

「へえ、あなた、よくやるのね」

「あなたは？」

「私はドゥーエでこっちが」

「あんたはあんときのー！」

「お前はあの時の私に……いって……た」

「セインしっかり」

「で用件は？俺を捕まえるのか？後、ドゥーエさんは素顔を見せてくださいじゃないと警戒しますよ」

「お見通しってことね」

「まあ変装を解いてくれたのなら話を聞きますよ」

と巽も警戒を解き話を聞くので場所を移動した
移動先は彼女たちに任せ巽は後を付いていき

「で話と言っつのは」

「あなた彼女居る？」

「いないですけど・・・それがどうしました？ダイナの力とかじゃなくて？」

「ええ、そうよ、よかったねセインちゃん」

と言うドゥーエに対し巽は首をかしげるが意味を理解した

「はあ？いやいや、俺あんまり接点なかったし、あつたのも二回目ですよ」

「これから増やせばいいんだから」

「あつそうだ一つ聞きたいことあるんですがこんなの見ませんでした？」

とバトルナイザーの画像を見せた

「あつそれ見たことある、確かクアット口姉さんが・・・」

「そうかありがとう、セイン、ドゥーエ」

「あつ待ってこれ、連絡先」

「サンキュー、また今度出かけようぜ」

と巽はバイクに跨って六課に帰ろうとしたらさっき暴走族に撥ねられた子供

がお礼を言いに来た

「お兄ちゃんさっきはありがとう」

「どついたしまして、悪い人たちは皆逮捕されたから大丈夫だよ、
だけど道路渡すときは横断歩道とかできちんとね」

「はあ〜い」

巽はウルトラマンに変身しなくても人は救えると思い、
この世界でも生きてていいのかなと考え始めた

「本音の暴露場？そして誘い（デートの）？」

暴走族を逮捕したのはいいが、なぜ仕事量増えた？と思うがまあモスラが速く羽化してくれないとこっちも困るし、抜け出しているのも

見られたから仕方ない？のか

Story12「本音の暴露場？そして誘い（デートの）」

巽は今日は朝練の後バイクの点検をしていた

「ああ、そつかくネットトラップの前使ったんだつたゝ材料買わないと無いのか」

「おう、お疲れさん」

「ヴァイスさんどうしました？」

「ガキ達を探してたぞ」

「解りました」

その後巽は廊下を歩いていたら何やら見かけないものを見つけたそれはまるでバーのようなものが廊下にあった

「なんでこんなのが？」

「いらっしゃい」

「ザフィーラさん？一体何をやってるんですか？」

「見ての通りのものだ」

「へえ、あつ、そのお酒とそのミント、梅干しのカクテルは美味しいんですよ」

と巽が指さしたのはジン、グリーンミントだったそして巽はその調合法まで

話し始めた。

「ジンの量が多いとグリーンミントのさわやかさが死んじゃって難しいんですよ」

と話しているとその分量で作ってくれたカクテルを飲んでしまう

巽は18になったばかり、20歳以下の飲酒は法律で禁止されています

「うっヒック、やっぱり美味いっすね」

巽はお茶と勘違いし飲んでしまった大事なので2回言う

彼は酒の事は詳しいが1滴でも飲むと酔いそしてその酒癖はランダムで選択される

しかし、今回は意外と普通？

「あつ巽ここにいたんだ」

「お、ヒック、スバルかどうした？」

「だとしてもこれは俺様に対する攻撃とみなした！」

「異テンションがおかしいよ」

「おかしくない！！これもすべて怪獣が悪いんだ！怪獣さえいなきゃ俺は普通の生活をしたんだあ、親父も死なずに済んだし未有希だつて……死なずに……」

と巽の愚痴は仕事からもう一つの仕事に変わったそして本当は巽の世界では

怪獣は活動を休止しているはずだったがX星人やテンペラー星人と言った

宇宙人のせいで活性化しさらには闇の封印を解き邪神ガタノゾーアまでも蘇らせてしまった事や、人間の勝手な判断で殺されてしまった怪獣を思うと巽は自然に涙を流し始め、動きを止めた

「っ畜生、俺に力が無かったばかりに……」

「巽、そんなことないよ」

「……そう……か？」

「巽顔色が……」

「多分……急性……アルコール何とか……だと思っ……マスター勘定をこれをお願い」

と会計を済ますと巽は自室に向け歩き始めたが千鳥足でそのまま顔面からこけて

また立ち上がるが今度は壁に激突する

「あれこんなところに壁あったけ？」

「もう巽どこ行きたいの連れって行くから」

「自室まで、多分・・・そこに薬がある」

と巽は言うが目が回っているのでスバルが肩を貸して移動したが巽が徐々に足を引き摺り始める

「っ、巽？」

「力が入らない・・・だけ酔いは解けたはず」

「巽さんそこにいたんですね・・・ってどうしたんですか？」

「ちよいと・・・酒を飲んだだけ・・・さ」

「だめでしょ」

「それにちよっとじゃないよ」

とエリオに体を支えられる巽はそのまま自室に向かって行き
そして自室前

「大丈夫・・・ありがとう・・・じゃあ」

「巽本当に大丈夫？」

「へ・・・いき・・・だから仕事に戻ってね・・・」

と帰る二人だが巽はそのまま布団に沈んだ

その後約4時間後巽は目が覚めて仕事をしに行ったが

「やべえ、なんか増えてる」

いつもの量+モスラの事に関する分のほかに何人かの分が追加されていた

が巽はそれをすべて1時間弱で終わらせた所にメールが届いた

「何だ？」

メールの差出人はドゥーエだった

「ドゥーエから？」

メール内容はまた出かけないかとい誘いだった

巽はOKと返信した

「さあてと、体動かすか（あれ？日時が書いて無かったような）」

と巽は腕に重り40キロをつけて走っていたがそこにまたメールが来たので重りを空に向けて投げ消した

「ドゥーエからか・・・」

メール内容は明日の午前10時と言う事だった

巽は迎えに行くから場所教えてとメールを打った

そして、夕食の時皆で食べていたがまたメールが来た

「おっ、来たか」

「誰からですか？」

「友達からまた遊びに行かないかっていう誘いだよ」

「へえ〜今度紹介してよ」

「そうだね話が合うんじゃないか？女の子同士で」

「えっ女？」

「ああ、大家族の2番目っていう共通点もあるし仲良くなったよそして姉妹そろって美人」

「へえ〜」

とスバルがスプーンを持つてる手を震わす、ティアナが笑顔だが何か怖い空気を出し
ギンガがどう動けばいいかわからなくなっているが異は気にしていない

「それできあ、そのこの夢かなえてやろうかなって思ってるし」

「夢？」

「家族が多くて姉妹全員の顔まだ見れてないらしいんだから、叶えてやりたいだけ」

「そうなんだ………そうい………きじゃないよ」

「最後が聞き取れなかったけどなんか言った？」

とティアナに言うがティアナは

「べ、別になんでもないわよ」

「ならいいんだけど、あつそういえばエリオたちは俺に何か用だったの？」

「最近あの繭がなんか動いて、なんか押しつぶされそうで怖くて」

「あくなら羽化が近いのか」

「羽化？つてことは飛ぶの？」

「ええ、モスラは大きな蛾ですから」

「」「蛾!?!」「」

「そうですよあれ蝶なわけじゃないすつか繭作ってんだから」

と言うと女性陣はなぜか暗くなっていた

その後巽は明日の準備をしてバイクを改造し

製作途中だった車に手を伸ばしその作業を終えた

ナンバープレートを貰いに行った

そして巽は何時も道理、車にこの世界での武器を装備した

それはツインメーサー砲、バリア展開装置、ネットトラップ、ケイブル弾
だけど普通こんなのつけるのか!?

「これでよし、大丈夫っしょ!」

と仕事?を終え寝床についた

「デート？追跡から逃げる！？」

誘的な物を、受けたけどなんかスバル達が冷たくなった
なんで？

story12「デート？追跡から逃げる！？」

巽は朝のうちに仕事を終わらせ、車にエンジンをかけて待ち合わせ
の場所まで
運転していたが後方から見慣れたバイクが追ってきてるのがよくわ
かる

「ティアナ達つけてきたな」

巽を追ってきてるのはティアナとスバルだった
なぜ追ってきてるかは今から少し前

六課内でのこと

「巽を尾行！？」

「バカ、声がでかい！」

「でも書類が……」

「大丈夫、許可は取ってあるから」

「それ本当？」

というの感じだったそして監視はティアナ達だけでわなく、なぜかその他のテレビカメラが後を追っている状況

「後、5人はいるな、どう振り切るかな！」

と巽は色々動かし、車を反転させそのままジャンプし下の道路に着地し、そのまま

目的地まで走る、そして巽はカラーチェンジ機能を使い青い車から赤に色を変え、武装も収納し、パトライトも格納し一般自動車と変わらなくなった形態で目的地に着いた

「お待たせ、時間にはギリギリセーフだね」

「おいしい、30秒オーバー」

「ちょ、厳しいすぎるって」

「ピザの配達はたった1秒が命取りなのよ」

「うっなげ、あなたがそれを」

「巽君、一般よ」

「やっほー巽！」

「ってセインは妙な所から出てくるし」

セインが出てきたのは助手席のシートから出てきて座った
ドゥーエは仕方なさそうに後部座席に座った

「あっそつだ、なんかテレビカメラとかが追ってくるから顔は隠した方がいいんじゃない？」

「異は知らないの？」

「なにを？」

「これよ」

と渡された雑誌？の目印があるページを見ると人気ランキングの所だった

「俺こついつの読まないから」

「とりあえずランキング見なさい」

「えっ俺一位だ、なんか嬉しい」

だがそのランキングは旦那にしたい職員ランキングベスト10そして、

兄or弟にしたい男性ベスト1理由は頼りがいがある、なんか一緒にいると楽しいなどで

今回のデートがHYという人物によつてばらされたのだった

「何だろうこのHYって人知ってる気がする」

「まあね、とりあえず行きましょう」

「了解」

車を運転する巽は普段道理だが安全運転に心がけている
だが後方に追手を発見した、相手はこちらに気付いているようだ

「セイン、ドゥーエ、シートベルトしっかりしてね」

と言いシートベルトをしたのを確認すると

またレバーを操作し車線を変更したかと思うとその追手の後ろに回り込み

エンジン全開で別ルートに向かった

「あれがさっき言ってた追手で多分どっかの取材班？」

「たぶんね、しかし囲まれたな」

「まあ、ここでお茶しましょう」

「わかった」

と一息入れた後買い物に行った3人だったが巽が目を離れた瞬間に悪漢に捕まっていた

「おい！俺の連れに触れんな！」

「なんだ！？お前の連れか？」

「じゃお前を倒してからだ！！」

と一人の男が巽に殴りかかってくるが巽は相手のすきを見つけて腹に重い一撃を決め、そして拳を抜いた、相手は崩れ落ちるように倒れた

「次は誰だ」

「この野郎」

「死ねえ」

今度は3人係りで巽に殴りかかってきたが巽は最初に倒した外道（巽目線）の背中を

跳び箱のように使い相手の体格のいい男に顔面キックを決め、別の相手に飛びかかるようにリアットを決めて、地面にねじ伏せ、残りの一人が飛びかかってきたがそいつの足をつかみバルカンスイングを決め相手の一団を倒した

「大丈夫だったか？二人とも」

巽は二人に声をかけたが二人はなぜか涙目だった

「なぜ泣いてるの？」

「巽がいてくれてうれしかったから」

「つ、巽がカツコよすぎだから」

と言われ、思わず照れる巽だがそこをティアナ達が目撃していたそれを知らずに巽は二人の手を取り笑顔で

「まっ、無事で何よりだよ」

所変わって物陰 side

「あの笑顔はじめて見た」

「私達、いや子供たちにも見せない笑顔だよ」

「「妬ましい」」

所戻って

「っ!？」

「どうしたの？」

「何かを感じただけ」

「疲れたの？」

「いや全然、とりあえず場所移動しよう」

だが巽は空に何個かの魂のようなものが一つになっていくのを見落とした

それが最悪の暴君になるとは知れずに

巽達は車の中で話していた

「巽って強いね」

「まあ、これぐらいできないと守りたいものを守りきれないしな」

「巽の守りたいものって？」

「お前達かな、それにドゥーエとの約束もあるし、まあ怪獣が出ても死なないように護るのはきついかな？」

「というとセインが乗り出してきた」

「何時の間にそんな仲に？」

「いや、そういうわけではないが・・・!？」

と巽はブレーキをかけ車をはじめに寄せ、車から降りて

空中を見上げた、そこにはかつて戦った怪獣達のパーツが集まっていたが

そこには巽の戦っていない怪獣のパーツがあった

「なんで、あの怪獣はこの世界で倒してないのにどうしてあるんだ」

「巽、あれって」

「あいつが生まれるには、もっとマイナスエネルギーが必要なはず、うち二人は避難して」

「巽はどうすんの？」

「俺はあれで都市部から遠ざける」

「と言いつつ巽は車、ゼレット？アナザーをフライトモードに変形させ

空に飛びその怪獣の前に飛んだ

が相手はまだ目を覚ましていなかったので巽はケーブル弾を打ち都

市部から遠ざけるように運ぶが中心部から離れもう少しでその暴君は目覚めてしまう

「もう少しなのに」

その暴君、タイラントはゼレットを追い始めた

「こちらスターズ05、ロングアーチ聞こえるか？」

『こちらロングアーチ、巽さん怪獣の輸送はどうですか？』

「怪獣が目を覚まし攻撃をしてくるが何とかポイントまで行けそうだけど

一応、地上の避難は終わってるか？」

『100%終わってます』

「了解」

と言いつつ巽は困っていた、こちらの武器はもう、ツインメーサー砲しかない

相手は無限の弾数を誇るタイラントだ

「つつこのままじゃ、」

タイラントの耳から放たれる光線はかつて地球を侵略しようとした宇宙人

イカロス星人の得意技のアーロ―光線はイカロス星人の物よりも強く巽はそれをかわすのに一苦労だったがポイント周辺に付いたため地上に降り、ゼレット？アナザーから降りて

地上から攻撃を加えたがゼレットにセインが乗っていたのを確認し
巽は走るがタイラントのアロー光線がゼレットに迫る

巽はダイナにチェンジし、ゼレットごとセインを守りそのままタイ
ラントの方に

向きを変え、走りだす、そして右拳に力を込めて殴りそのまま連続
パンチを決める

がタイラントの鎌による一撃をくらい、地面に倒れこみそしてタイ
ラントに蹴られるが立ち上がりフラッシュ光弾を放ったが腹の口で
吸収され、そのお返しにタイラントの口から

本当は出ないはずのイーヴィルショットのような光線がダイナを直
撃する

「なんであの技を使えるんだあの技は闇の者の！」

ダイナイや巽は驚いていたがその隙をつかれ、首にタイラントのワ
イヤーが巻きつき

さらに電撃がダイナの体を駆け、ダイナは膝を地面につけるがその
ワイヤーに

魔力弾が当たりワイヤーが緩みダイナは脱出した
その魔力弾は六課前線メンバーのフリードだった

「サンキュー、フリード、キャロ」

と伝えるとダイナはタイラントの腹に蹴りを入れストロングタイプ
にチェンジして

回し蹴りを決めてさらにとび蹴りを決める

「ティアナ、スバル、ギンガは後方から攻撃を、エリオ、キャロは
やつの側面から攻撃にして、俺に当てても大丈夫」

と伝えるとダイナはタイラントの下あごを殴り、そのまま相手を持ち上げて

地面に叩きつけ、また投げつけようと接近したら

タイラントの冷凍ガスを浴びてしまい、体が凍り始めると同時にダイナは苦しみがき

地面に倒れこんでしまいタイラントに首を絞められ、カラータイムーが鳴り始めるがそこにまた、誰かが話しかけてくる

「どうかな？この最新作の怪獣は？」

「なんだと？」

「この怪獣タイラントは異世界から来た怪獣でね、ちよいと核コアに細工をしたのさ」

「道理で、電撃とかが……」

とダイナは相手の会話に答えるも首の締め付けがさらに増すがダイナは相手の腹に両足でのキックを決め、脱出に成功する

「さっきのおかえしだあ！！」

タイラントの顔面にダイナナックルを決めて相手と距離を離しフラッシュタイプに戻る

「さあこの後お前はどつする？このタイラントは一味違つよ」

「どつするもこつするもねえ！こいつを倒すだけだ！！」

ダイナはソルジェント光線を打ち込むが腹の口で吸収されることは分かっていた

がそれでも打ちこみ、今度はスペシウム光線を打ち込んだそれはこのタイラントの

一瞬の弱点を見抜いたからだそれはこのタイラントは喉に再生怪獣サラマンドラと

同じ赤い部分があり、タイラントの強さは超古代怪獣ガルラの力が上乘せされていることと推測した結果だが、その確率は低いが異は可能性が0で無いなら挑戦する男だ

その青白い光線は一方は相手の腹の口に吸収されるがもう一方は完全に相手の喉を貫き

さらにその下にダイナはおろしながらタイラントを切断するように攻撃し

タイラントは鮮血をまきちらしながら地面に倒れこみ爆発し、ダイナはそのまま小さくなって消えた

異はさっきの声と会話していた

「貴様、姿を現せ!!」

「さすがダイナだね、タイラントを倒しちゃうなんてあれ結構捕まえるのに手間取ったんだよね、でも簡単に改造できたし」

「貴様、やはり無理やり改造したのか!!」

「そりゃ君だって望みもしない力を手にしたんだろう」

「……なぜ知っている」

「君の過去を見たからねえ、おっとそろそろ君の友達が来ちゃうよ
うだし、じゃあまた今度」

「貴様！！どこへ消えた！！！！」

と巽は空に向かって叫ぶが返事は返ってこない
そこへスバル達が来る

「巽さん大丈夫ですか」

「巽大声あげてどうしたの？」

と聞かれ巽は振り返るがその顔は怒りが溢れ、額から血が流れてい
るようにタイラントの帰り血を浴びて、さらに白いバリアジャケット
トを巽の血で赤く染めている姿は

少なからずその5人に恐怖を植え付けてしまっただろうしかし巽は
そんなことを気にせず巽は六課に帰りながら謝罪のメールを送った

「これであいつも闇に染まり始めた・・・僕もこの体からやっと出
れるよありがとう巽」

とその声の主は笑い始め体が闇に包まれ始めたそして巽に向けて何
かを飛ばした

「さあ巽君を闇に染めなさいワロガ・・・ああそうだったワロガ六
課の誰かに巽を打たせることを忘れずに」

「異撃たれる、壊れた信頼関係!？」

やっと異君も闇を育て始めた、これで僕の復活が近付いていた。後は信頼関係を壊せば異は六課から離れてくれる。異君がいると邪魔だからね

Story 13 「異撃たれる、壊れた信頼関係!？」

昨日の戦闘が有ったため異は一人で練習をしていたがそれはまだ傷の癒えない異にとって過酷なものだった、タイラントとの戦いで大けがを負ったのに内容はタイラントとほぼ同じ動きをするロボットとの戦いだ

「ハアアアア!! テヤア! ウエエイ」

と連続攻撃を決めるが足にワイヤーが巻きつき地面に叩きつけられるがワイヤーを切断し

ロボットの首を文字道理蹴り飛ばすがそれと同時に足から鈍い音が聞こえたが気にしない

そして相手が後ろに下がったのを確認すると走っていき

「ハアアアアア、トウツ、セヤアアア!!」

飛び上がり、空中で一回転しそのまま回転しながら相手を貫くように蹴りを決めて振り返り腕を十字に組みソルジェント光線を決めるが腹で吸収される、そして首も再生した

「あれえ? リモコンどこだっけ? あいつ止まんないなあ」

とロボットの鎌が巽に向けられるがティアナの操作が速く動きが止まった

「まったく私が見つけれなかったら怪我増えてたわよ」

「ティアナ助かったぜ」

と巽はそう言うのと腰について近くに置いてあったペットボトルを取るが中身は空だった

がティアナがペットボトルを渡してくれた

「おっ！炭酸じゃんサンキュー」

「なんでこんなことしてるの？」

傍から見れば、自分の苦戦した相手と同じような事をするのか？無理をしているのではないか？と思われるくらいだ

「まあ、別個体が出た時ようかな？元いた世界じゃこんな当たり前だったからさ……」

「巽はさあ、帰りたい？」

「それは当たり前さ、元々この世界に存在しない人物だし、それに向こうの世界で、帰りを待ってる人がいるのに手掛かりは何にもないんだ……焦ってるよ」

と言う巽の顔は悲しみに埋まっていた、
さらに巽はこう続けた

「ヴィヴィオより小さい子をさあ、ほつたらかしたげ、あいつらが心配でヴィヴィオを見ると思いたしちまってさあ……………」

「だからアンタはヴィヴィオとあんまり遊ばないんだ」

「なんか、ヴィヴィオとあいつらを重ねちゃってさ……………」

巽は元の世界で孤児院でよく子供達と遊んでおりそこには巽の親友のティータが残っていた妹達もいて巽が20になったら養子にしようと考えていたのだったが

今じゃ別世界で遭難し、元の世界へ帰る術も分からずここにいる

「速く帰りたのに帰れなくて、怪獣まで出てくるし……………俺も怪獣に対抗できなくなってるし一体どうすればいいのか」

「巽って意外とメンタル弱い？」

「多分な、……………そろそろ戻らないとな……………」

といい立ち上がり巽はいつもより早く帰っていたが残ったティアナは巽が倒したロボットを見ていたがその次の瞬間、紫色の光がティアナの中に入っていき瞳が紫色に一瞬だけ変わったが元に戻り巽の後を追う

そして、夜

巽はいつも屋上で夜空を眺めるのが習慣で今日も来ていたが後ろから激しい痛みを感じ振り返るとそこにいたのはオレンジ色の髪でツインテールの

よく知る人物がいたがその後ろには巽にとって二度と見たくない相

手、かつて恋人の命を奪った相手のワロガがそこにいた。

「ワロ……ガ……貴様、ティアナに何を！」

「ウマクイッタ、コノモノハツカエタ」

と

ワロガは巽にそう言いながら近づき頭を踏みつけ、地面にゴリゴリと押しつける

巽は口から血を吐くが立ち上がるうと力を込める

「てめえ……今度は……ティアナを・殺す気か!!!!!!」

「マダ、ソナチカラガアッタカ」

「俺は貴様らのようなやつを……殺す!!!!!!スペリオル殺傷モード」

< However, then you die; cannot do it >

「そんな心配しないでいい速くしろ!!」

< Roger >

「ソナ、カラダデナニヲスルツモリダ」

巽の右胸から血が滲み、立っているのもやっとの状態なのに巽はスペリオルを構え、相手を狙うが

「コノオンナヲコロスキカ？アノオンナノヨウニ」

とワロガにいわれると巽は一瞬のためらいが生じてしまいそこをワロガにつかれ、

吹き飛ばされてしまいスペリオルは屋上から落下する

「ゲホツ・・・くっ、そお・・・」

「アンシンシロ、コダイツバサ、ワタシハ、ソウイウコトハシナイ、タダカラダヲカハイシャクスルダケダ、デハサラバダ」

「・・・・・・・・・・きれいな夜空だな・・・・・・・・よく家族と見てたっけ・・・・・・・・ここでも・・・・・・・・」

と巽はそう言うと言目を閉じてその場で力尽きてしまい、まるで糸が切れた操り人形のごとく、意識を失ったがそのすぐ後にスバル達が駆け付けたため、何とか一命を取り留めた
ティアナも同じく医務室に運ばれた

「それで？犯人は？」

「それが・・・・・・・・ティアナなんです」

「なんやて？」

「そんなことあり得ない」

と隊長陣とFWは二人の様子を見ながら話していたが
巽が目を覚まし起き上がり、周りを確認し傷口を見ると包帯で処置

されていたが
激痛を感じるが何か無い

「あれ？俺なんでこんなところに居るんだ？俺は確か、ブルトンを倒した後
飲み込まれたんじゃないのかなかったのか？」

そう、この世界での記憶が消えていたのだったワロガの怪光線の影響で記憶が消え、
巽はその場から起き上がり服を着て何処かへ行こうにも場所が分からずにベッドに腰を下ろすがそこへスバルがやってきた

「巽起きてたんだ」

「誰だ貴様、なぜ俺の名前を知っている？」

「えっどうしたの？巽」

とスバルは近づくと巽は警戒心を解こうとしなく、そのままスバルを飛び越えようとするが傷の痛みで地面に倒れこんでしまう

「ッ！なぜ攻撃しない？今のはチャンスのはず」

「さっきからどうしたの？私達、仲間でしょ？」

「どういうことだ？俺は宇宙にいたはずだ」

「ねえまさか記憶が消えちゃったの？」

「……多分、そうらしい。俺はお前らの仲間であるという記

憶が無い」

その言葉を聞いたスバルは涙目になり、巽は複雑な表情になり顔を伏せたが次の瞬間
口を開いた

「で？俺を撃つた人物はこいつで、操ってたのは誰だ？」

「えっ？」

「お前はこいつがそんなような腕を持つてるとしても仲間の右胸をぶち抜くか普通は脇腹だろ？」

「確かに……」

「気が動転して大事なことを忘れてるんだよ、それに俺の記憶は六課むくの記憶だけが消えているだけだ安心しろ」

「でも手掛かりは？」

「大体見当は着いているが手口が違うのが気になるが……大丈夫だ」

というとその場を後にし、六課を出て行き、夜に再度撃たれた場所に現れ

犯人と対峙した

「おい、いるんだろ！！ワロガ！！！！」

「バレテイタカ」

「さあて、ティアナの中にあるチップを解除してもらおうか」

「キサマ、キオクガアルノカ？」

「記憶喪失の真似ごとは簡単だし、それにお前の偵察兵がいることも気付いているぜ」

「フン、ナラバカイジヨシテヤロウ」

ワロガの発言は巽の予想と違ったが巽はそれが嘘ではないか確認する

「貴様は目的を果たしたのか？」

「ああ、それが僕さ……古代巽君」

と空に浮かぶワロガの後ろから一人の青年が現れたが、姿が自分そっくりで巽は驚いた
がそれを知ってか相手は喋り始めた

「僕がこいつを使ったのは体を手に入れるため、女の子の体借りるつて肩こるよ」

「は？知らんはそんなもん」

と呆れながらも答えた巽

「まあ、でも安心して体に使ってた人達はみんな元気だよ」

「それ聞いて安心したぜ……でお前は何もんだ」

「僕は……そうだね……名前考えてないから、カイザーザギでいいかな？」

その名には聞き覚えがなかったが最後のザギという名には聞き覚えがあった

ザギ、闇の主でもいえる存在でありこの宇宙いや多世界の闇の生みの親とでもいえる存在だ

「でお前は何のためにこの世界に居るんだ？お前は俺と同じような世界の生まれだろ？」

「そうなんだけどね、ノアにやられてさあ閉じ込められているうちに力が消えちゃってさあ、人の欲を利用してもらって回復中なわけ」

「なら今ここで！スバル、ギンガ決めろ」

とワロガとカイザーザギにバインドがかけられ動きを封じ、アタッカー2人に猛撃させたが相手は簡単に巽のバインドを引き千切り、空に飛んだがワロガと巽がもみ合いになり地面に落下する前に二人とも巨大化し、ダイナとなった巽はワロガの頭を殴り、バイザーを壊しもう一人の相手にも蹴りを浴びせる

「まったく、巽君は血の気が多くなっただね」

「お前を倒せばこの世界から出れるはずだ！」

とダイナは自分から2対1の不利な状況を作ったがダイナはワロガの腹に蹴りを決めると振り返りザギに2発のパンチを決めて、スぺ

シウム光線を浴びせてワロガにバルカンスィングを決めて空に投げ、ソルジェント光線で爆発させ、ザギとからみ合い海に向かって飛ぶ、

「貴様、海中で俺と互角に行けるか!!」

「確かにその考えはいいけど僕とて」

とザギはダイナを蹴り飛ばし、海底にぶつけるがダイナは受け身を
取りそのまま跳ね返り、
相手を岸壁にぶつける、ストロングにチェンジする。

「闇の巨人の癖に弱いな」

「でも君もここじゃつらいんじゃないの？」

「そんなことはないぜ」

と言うダイナは相手に渾身の一撃を決めるがまたダイナは連続パン
チを決め、相手の足を持ちジャイアントスィングを決めるが相手は
コア・インパルスを繰り出し
ダイナはガルネットボンバーを繰り出し激しい爆発を起こし二人を
地上に弾き飛ばす

ドカーンと音とともに巨人がさつきと同じ場所に落下する

「なんや？さっきのゆれといい爆発は!？」

「巽君が戦闘してます」

「そのうち一体は活動停止です」

と隊長に説明するスバルとギンガ
だがそんなことを知らない巽は戦い続けていた。

ダイナとザギの拳がぶつかり激しくスパークするがその光で活動停止になっていたワロガが起動し、ダイナを羽交い絞めにする

「てめえ離しやがれ!!」

ダイナはエルボーを決めて、ワロガを持ち上げ地面に叩きつけ完全に爆発させるとザギに向かうが光線で弾幕を張られるがダイナは突き抜けて思いつきり殴るがカラータイマーが両者なり始める。

「おや、そろそろ時間だな」

「……………どうかな？」

ダイナは、いや巽はにやつと笑い、そのまま相手を捕まえ、体を燃やしその場を明るく照らしさらにダイナは燃えるまるで永遠の炎の如くそして相手が解け始める

「貴様、そんなことをすればお前とて！」

「……………それが、もう俺自身もたねえからよ別に気にしねえ！」

巽の体はこの世界に来る前から光の拒絶反応で体の自由が利かなくなっていたが

六課の皆に心配されぬようにいつもばれぬ様に耐え続けていたが、自分の余命を悟り

禁断の技をつかったのだった。だがそれは文字道理命を消費する技

「貴様あ！！離せ！！俺はここで死ぬはずではない」

「残念だったな……俺がお前を殺してやるぜ！！」

と言うと巽は完全に炎上し、そして二つの巨大な人はその姿を残さず
に燃え、爆発し、

その場所にはただ緑が焦げた跡しか残っていなかったが先ほどの熱
で羽化したモスラが何か光を発し、巽だけを救った……

……

「傷と決心」

ザギとワロガの戦闘にて巽は、全力を尽くし戦い力尽きともに戦った戦友により助かったが

Story 14 「傷と決心」

巽が気を失って、いる間にモスラが説明を始めようとし、人間になるが目つきが怖い
そしてなぜか巽の体にくっついていて、近付こうものなら噛みつく
雰囲気を漂わせて、周りは静かになっていた

「巽はどうなんですか？」

その静寂を破ったティアナは巽の様態を確認したがモスラは鋭い目つきで答えた

「巽は今、峠を越えたところ！」

「で君は？」

「その二人がめっちゃくっちゃ引いてたモスラだよ！」

とモスラは青い瞳でスバル、ティアナを指さし怒りを示しさらに電撃を使おうとしたが
落ち着いた

「巽について説明しとくよ、巽は適合者じゃないからダメージがた
くさん残ってしまう」

「なんでうちらが聞こうとしたのがわかったん？」

「読心術ぐらい当然あるよ、話を戻すと、それ故に寿命をすり減らしているわけで〜え〜と？あつそうそう、たまに巽が自分の命を捨てれば皆助かるって変な思い違いを起こしちゃう時があるの、そして、いつもストッパーの兄ちゃんや、眺姉ちゃんもいないから・」

と語っているうちに巽が起きだして何かを寝ぼけながらつかもつとしたら

モスラを突き飛ばし、そのまま踏みつけた

「てめえ〜誰だ？なんで俺にひつついていた？」

「『『『寝起き悪っ！』『』『』』」

巽はモスラから足を退かし・・・たと思つたらモスラの顔を見てもう一回踏みつけた

「なんか、お前ウザい」

「お願い、足退かして〜あつやつぱ踏んで〜」

「『『『『Mだ』『』『』『』』」

「ふざけんな！！」

と言いながらさらに踏みつけて、巽はそのまま水を飲みちよつと落ち着いたらしく、

足を離しベットに腰をかける

「で？お前モスラ？ふざけんな、お前はもうちょっと早く羽化しろ
」よ

と説教し始めるが途中で状況を確認した

「部隊長、被害は出ましたか？」

「いやでてない」

「了解、ティアナ調子は？」

「大丈夫、巽は」

「平気、それよりもリーフラッシャーの様子がおかしいんだ」

「えっ、それやばくない？」

「ああ、俺も無茶したもんだな」

「そうよ、どれだけ心配したのか！」

「ティアナがやけに素直な気がす・・・」

バコッン！

巽は、ハリセンで叩かれた

「ばっかじゃないの！」

「それよりもこれから任務か？」

とちよつと興味のある顔で聞くが内心はエネルギーの消耗が激しいからパスといたいがい

色々迷惑をかけているのでそうとは言えずにただ確認を取るぐらいしかいえない

「そうですね、巽さんは参加できそうにないですね」

とエリオが言いながら、巽の脇腹を見ると巽も見て再度確認する、そこにはまだふさがっていない傷があった

「じゃ留守番は任せな」

「そしたら、ヴィヴィオの面倒見てね」

「サー、イエツサー！」

と言い皆を見送ってからヴィヴィオの遊び相手になったがなぜか……

「いいか、魔力や気力をこつ集めて……はぁ！」

「ええつとこつ？」

「そうそう、これでフラッシュ光弾が……いや、マジックショットかな？」

「これでママ達驚く？」

「これは、ジュニアGUTSのプレゼントのかくってこっちはイヤ
リング？」

女を乗せた記憶が無い巽は考え込んだが結局無い

そんな事をしている間に時間は経つ。そして巽の気付かないところで
悪しきものが活動を開始したそれは腕がサーベルの宇宙人と洗脳が
解けてもウルトラマンの力を狙うものだった………

「炎上、燃え尽きた光」

負傷した俺は、任務から外れ、休養中だがヴィヴィオの面倒を見て
いるが
カプセル怪獣達が騒いでいるし、気になることはもうないはずなの
だが・・・

「炎上、燃え尽きた光」

古代 巽は現在、スペリオルの整備中だがそうしているうちに何か
の視線を感じそこにスパナを投げつけるとそこにはこの世界で倒し
損ねた怪獣いや宇宙人がそこにいた

「ダイナ、貴様によって消された片目の仇を撃ちに来たぜ！」

「貴様はマグマ生きていたのか！！」

「ああ、だからこそこうして！！！」

マグマ星人は自慢のサーベルで切りつけようとするがその寸前でタ
ツクルをくらいそのまま地面に叩きつけられ、巽は相手にのしかか
りそのまま殴り続けていたが、マグマ星人は巽を蹴り飛ばす、巽は
壁にめり込むがそのまま、スペリオルストライカーで相手を切りつ
けるが相手は腹を蹴られるが空中で回転し

「月面きりもみキック！！」

「喰らえ！！！」

冷凍ガスを吐き付けるがそれは逆に巽の技の威力をあげ、その技はいつもの2倍の威力を発揮した、その直後巽の後方が爆発し、破片が巽の体に刺さりかけるが回避するも爆風で飛ばされる。

「あなたを連れていきます」

「っ誰だし！こっちはこいつの相手でさえもつらいのに！」

「悪いがこいつは俺様の獲物だ！！」

とマグマが後から攻撃してきた戦闘機人に向かってサーベルを向けた瞬間に巽はそのサーベルの持ち主に向けて手から炎を出して攻撃した

「戦闘機人とはいえ、こちらの世界の住人だ、手出しはさせねえ」

と何時になく真剣な表情で、マグマをにらみ、そしてそのまま構え相手に突進し相手のサーベルをへし折ろうとしたが、はじき返されかける。

「まだまだ！スペリオル、ブレイズバージョン！」

手に持っている銃型デバイスの形状を銃身の長い形に変えて再度接近し冷凍弾を連射する

マグマの体は徐々に凍りつくが相手はもがき氷を剥がす

「悪いけど手伝ってくれるか？」

「まあいい……（掴み何処かが何処か分からない）」

「じゃああいつの頭爆発させて」

「解った」

と指示を受けた戦闘機人は容赦なく爆発させ、その瞬間に凍らせ、銃型のデバイスを剣に変えて、力を溜める

「……………閃光一閃!!」

と光の速さで切り付けるが後わずかで届かないなぜなら人間サイズのブリッツブロッツがそこにいて、片手でマグマの心臓を貫き、片手で巽の攻撃を受け止めていた

「ブリッツブロッツ? ってことは」

「キエエ!」

「うわっ?」

ブリッツブロッツが巽に突進しそのまま空中に連れて行かれる。巽はGに耐え続けるも途中で意識が薄れかけるがブリッツブロッツの胸に銃口を突き付け連続発射する

「キエエ!?!」

「離せこの天狗野郎!!!」

とブリッツブロッツの拘束から脱出したがそこは空中、重力に引かれてそのまま落下し、さらにブリッツブロッツの追撃が入りものす

ごい勢いで落下しながら

巽はダイナに変身するもそのまま六課の天井を突き破っていきある程度破壊した後で止まり、ブリッツプロッツを地面に叩きつけるがそこはギンガが戦っているところだった。

「ギンガ!？」

「巽君!？」

「お前達は下がってる!」

「えっ」

「だから、その戦闘機人達も避難しやがれ!!」

と言うと相手に向かって拳を振り上げるがここはさっきまでギンガ達が戦っていた場所つまりまだその域には魔力が飛散していることに巽は気付かなかったいや、気付けなかった

「グワアア!!」

ブリッツプロッツの胸に隠されているエネルギー吸収装置のようなコアから放たれた光線はダイナを向かい側の壁まで飛ばし壁にめり込むが今度はダイナがソルジェント光線を発射し相手の光線を相殺するも爆発が起こり周りをまきこみ御互い巨大化し空中で戦いを繰り広げるもダイナはすぐに地上に落とされるが、すぐに立ち上がり相手の蹴りを捕まえ地面に叩きつけ、マウントを取る

「貴様、誰の命令で!!」

「ヒカリキエ口、ヒカリキエ口」

「てめえ!!!」

ダイナは相手の胸を何度も殴り凹ませるが相手の手刀で腹を刺され、光が流れ出る

がダイナは離れない、ダイナは拳にスペシウムエネルギーを溜めて殴り相手のコアを破壊し相手を持ち上げようとするが力が入らないのでそのままソルジェント光線を打ち込み倒し六課の消火活動にうつろうとするもエネルギーが傷口から漏れていることを忘れていたダイナにはエネルギーの消耗がいつもの3倍と言う事に気付けなく力尽き。その場に倒れ込み目の光が消えて、カラータイマーも消えてしまう。

人間体に戻ってもピクリとも動かない。

そこへすっぱり入る大きさのケースを持ってきた3人の少女が持ってきてそのまま巽を入れようとする

「ねえねえ入らないよ」

「押し込めば何とかなる」

「わかったよ僕がやる!!!」

とその子供たちに詰め込まれた巽は何処かに連れ去られてしまう

「捕まった所は案外気楽？」

俺が覚えているのは、炎の中ヴィヴィオが連れて行かれる所と俺がガキどもに拉致された所までだ・・・その後はよく覚えてないが周りがやけに柔らかいのは分かるが・・・なんなんだ？

「捕まった所は案外気楽？」

・・・・・・つこは？と疑問を思った次の瞬間期待が外れたように力が抜けたそれはなぜかぬいぐるみの中にいたからだつたがリーフラツシャーがないことに気づく

「しまった！またこのパターンか！」

とつい口に出してしまうがその周辺をみるとなぜかスパークレンスが落ちていた
それは巽の父親の所有していた物と同じものだった事に気付き拾い上げる

「これは・・・っ!？」

『巽、お前に頼みがある』

「父さん!？」

『ああ、この世界の3人の闇から生れし子供たちを助けてやってくれ、あとお前のダイナとしての力は消耗しきっているだからこのス

パークレンスがあるそのことをよく考えて行動するんだ」

「どういう事だよ父さん、俺にはもうダイナの力は使えないのかよ！！」

『……………もうお前の戦う理由は目の前のあの赤い球の破壊だ』

「赤い球？…………あれか」

と巽は近付き触ろうとするが弾かれてしまう。

「はあ！？…どういふ仕組みだ？まあいい破壊してやるぜ！」

巽自身で気付かなければならないものそれはいつの間にか考え方が闇の者と変わらなくなり口では守ると言いながら戦い方は、守るといふより破壊だった。

「うあああああ！！」

「…………そのバリアは堅いよ」

「そうなのか…………って誰だ！」

と言ったとたんなぜか後ろで爆発を起こし、ポーズをとりながら

「蒼き閃光！雷刃の襲撃者！」

「なら俺も、世界を超えやってきた戦士！ウルトラマンダイナ、古代 巽だ！覚えておけ！」

「「っでござる(の)？」」

考えなしの人たちだがその分親近感がわいて、

「人の未来を守る戦士、ウルトラマンダイナ！」

「蒼き稲妻、雷刃の襲撃者！」

「なにやってるの？」

「子供と遊んでんに決まってんじゃないっすか？高町隊長……
ってあれ？」

と振り返るとそこには隊長ではなく、ただの子供だった

「(。(。(どうなってんの？」

巽には負荷が大きかったようで少々フリーズしたがその後再起動
彼女は星光の破壊者というらしいが名が物騒である

「へえ〜二人とも小さいのに苦労してるね〜」

「あのバリアを破壊するには、力の巨人、俊敏の巨人を倒さないと
いけないんだ」

「OK把握した俺が何とかするよ」

と言いつつその後力と俊敏の巨人のもとに向かったが
巽は大事なことを忘れていたそれは、今変身できるのがダイナでは

なくティガダークだという事

「ティガ!!!」

ティガダークはそのまま突進していき飛び上がりそのまま飛び蹴りを決めるも、
効果は薄い

「おう、my friend」

「久しいな、しかしいきなりとび蹴りかよ」

「挨拶は抜きで行くぜ、親父の友達さん」

「アムイの子供か、いいぜえかかってきな!」

「カミーラはいねえが裏切り物の子供ぐらい簡単簡単!」

とティガダークはゼペリオン光線を打ち込み先制を決めるも効き目は薄く

逆に光線の波状攻撃が来るしかし回避すると子供達に当たる危険があるため

自らの身を盾にし庇いその光線を自らの力に変え

ティガブラストへ2段変化した

そして立ち上がると同時に、ティガ・マルチに変わり光線で一掃したように見えたが

まだ健在だったしかも今度はゼペリオンの力を吸収しさらに強力になっってしまった。

「毎度同じ目に会うかってんだ!」

「なに!？」

とティガにとび蹴りを決めたがティガはパワータイプに変わり相手の足を持ち上げ地面に叩きつけて、トルネードスローを決めるとその後カラータイマーを撃ちぬくように殴り

破壊しその後スカイタイプにチェンジし空中からのとび蹴りで俊敏の戦士を攻撃し、そのまま地面に押しつけ、そのまま、相手の腕を持ちそのまま、背負い投げを決め

カラータイマーを引き抜き倒したが

今度は自分と同じ姿をした巨人が首を絞め始め何かを言いだした

「貴様、その力は何のためだ？」

「……………は？」

「何のために使い、何を守る力だ」

「……………とをまもる」

「……………」

「人を守る力だ!」

「……………じゃあ、守って見せるよ、破壊神が!!」

と地面に叩きつけられ相手はゼペリオン光線を先ほどの子供たちに向け発射した

巽は子供達の前で止まりそして身を盾にして光線を受け続け、胸の命の輝きが点滅を始めても動かずにただ相手の隙を狙っていた

「っ………まだまだ!!」

巽ティガは、そのまま光線を受け続けながら相手に向かって一歩ずつ前に歩きそして、
光線を振り払い

「本物の威力見せてやるよ、偽物!!!!」

最後の光エネルギーを使い最後の光波熱線を繰り出し、幻想巽ティガを消滅させ、
たがその時の巽はこの世界に来て間もない笑顔が絶えない巽になっていた

「大丈夫だったかい？」

「………うん」

二人は何かを隠しているかのように思えた巽は

「何か隠してる？」

「……えつと……」

「ここはきちんと決めるっていきつたじゃないですか」

「分かった、頑張る」

「どうかしたのか？」

「私がお前にまたこの力を授け、邪神たちを倒すのだ！」

「?・・・ああ、サンキュー！」

と言い頭をなでる巽はその小さな手からリーフラッシャーを貰い受け、ポケットにしまい込んだ

「でもね、過度のパワーアップ、ダウンのせいで苦痛が付きものになる」

「強い力には代償が付きものだからきにすんな」

「あ・・・気が付けて・・・ええつと?ああと?」

「まあ無理に難しい単語は使わなくてもいいんだぞ、じゃ俺は元の場所に戻るぜ」

とリーフラッシャーを掲げた時

「待ってください、機動六課の皆さんはすでにこの時空のずれの原因と戦いを始めようとしています、そしてその原因は邪神の姿を借りています」

「イリスか?」

「はい、ただコアの部分が弱点になってますのでそこを狙ってください」

ああ、解った、あと親父によろしく」

と言い残すと空に飛び立った。

「邪神と光と絆」

異が巨人たちと戦ってる頃、ブルトンが血眼で捜していたコアは怪獣いや

邪神の姿となり地上に降りゆりかごを墜落させ、街を火の海に変えようとしていた

その姿はまるで四聖獣の一体、朱雀とも思え、身体から生えた触手は音波メスと火球を放ち、あらゆる攻撃を防ぐ最大の盾であり武器である、異が残したカプセル怪獣達が攻撃を加えるが簡単にはじき返され、徐々に命の灯が消え始めている。そして機動六課は自分たちの目の前の敵で手を焼いていて、邪神の事は怪獣達に任せているが怪獣達はもう力尽きようとしていた

とその時イリスを弾き飛ばした光が一つの形となり、現れた

「待たせたな！お前ら！」

「グルルウ」

「お前たちはカプセルに戻りな」

と言うとカプセル怪獣達を戻したと思ったがティグリスだけが残りそのまま突進していったが触手に首を掴まれ地面に叩きつけられる。ダイナはその後すぐ、体当たりから掴み技を決めるもそのまま触手から出された火球により、ダメージを食らうもそのまま、相手に向かうが腕の槍で刺さりはしなかったものの

弾き飛ばされ地面にめり込むもすぐに受け身を取り立ち上がり、フ

ラッシュサイクラーを放ち触手を斬り落とす。

「ティグリス!!!」

しかし、ティグリスの腹にイリスの槍が刺さり、もがくがティグリスはそのまま相手のコアの部分に噛みつきコアを露出させる

「ヒカリ・・・キサマモカ・・・」

「がああああ!!!」

ダイナはそのコアに向かって行くが火球連打を喰らい、足を付くもそのまま走りどび蹴りを決め、ソルジェント光線を撃とうとするがイリスの後ろにはゆりかごとと呼ばれる物があり迂闊に打てない。

そこで反対側に回り込んで蹴りを入れて間合いを取りそのまま、フラッシュ光弾を放ち相手突き放し、相手の隙が出来た右腹に蹴り込み反対側にパンチを入れてダメージを与えていくが不意に背後からの触手で首を絞められさらに腕にまでからみつき身動きが取れない。そして火球攻撃を浴びてしまいがその炎を形にし触手を焼き切る。

「ヒカリ、ジャマヒトノヨクノ暴走ハ、止メラレナイ」

「そうかな、現に俺はお前より優勢だぞ？」

「ソレハ、ドウカナ？」

「？だが俺は負けねーよ」

とダイナは倒すべき相手に向かって力強く言いその後
一歩前に足を踏み出しこつ続けた

「例え力尽きたとしてもお前をこの世界いやこの次元から消し去つてやる！！」

ダイナはその後相手に飛びつきマウントを取りコアを狙うがそのコアからソルジェント光線が放たれ、さらにプラズマ火球の追い打ちが入りダイナは地面に倒れるご入れ替わりに傷ついたティグリスが攻め、ダイナはウルトラスラッシュを放ち相手を追い詰める

そして、イリスの頭にダイナのけりが炸裂し、火花が飛び散り相手は倒れ、ダイナは相手を持ち上げて、地面に頭から落とすが相手の体は、地面に届かず、空中に舞っていた

そして相手は空中から地上に、プラズマ火球、ソルジェント光線を乱射するがダイナがそのすべてを受け止めようとバリアを展開するが即座にひびが入るがダイナはミラクルタイプにチェンジした、だがミラクルタイプの蒼い部分は青紫に染まっていた。

その頃、地上での戦闘は終局を迎えていた。
がそこにダイナが飛んでくる

「えっ！？ 巽？」

「嘘！？」

「お前ら感心してないで逃げろよ！！」

「最近こんなの多いから慣れちゃった」

「つたく、いいからさがれ」

と言いだイナはそのまま相手の光線を反射し相手にぶつけるが相手のバリアで無効化されてしまうがイナはそのままエネルギーをぶつけ続けて、バリアを破りそのままとび蹴りを決めるしかし、ミラクルの消費でカラータイマーが鳴り始めてフラッシュに戻りソルジエント光線を放つが相手のコアに吸収され、反射される。まるでダイナの動きを真似しているかのように

「グワアア!？」

「あいつの動きまるで巽じゃない！」

と鋭い分析をしていたがその後すぐに愛用の武器を構えたその射線上には触手で首を絞められ、さらにエネルギーを吸収されているダイナの姿だった。しかしダイナのカラータイマーは消えかけていた

ドンツ、何かが爆発した音が聞こえ、相手の方を向くと眼から爆煙が上がっており。眼を押さえ、もがき、周りの物を手当たり次第破壊しようとしていた。

なんで俺は気付かないでいたんだろう、もう数カ月になるのに、俺はあいつ等を信じてると言葉では言っていたのに本当は思っていなかった。それどころかこうして助けてくれて貰うなんて思っていなかった。でも今、はつきりした。あいつらは俺よりもすごい、自分の敵が目の前にいるってのに、イリスの眼を撃ちぬきやがった。もう世話にはならねーよ

ダイナは仲間の敵に目くらし位の威力の光線を放ち、借りは返したと言わんばかりの表情でイリスに向かって走る。折角仲間が作ってくれたチャンス、無駄には出来ない

イリスが苦しみで背を向けた瞬間、相手に取り付きそのまま成層圏まで飛び上がる何しろ相手は体内でソルジェントやスペシウムを化合できる化け物である。もしかすると爆発と同時に、大規模な爆弾ともなりかねない。

そして二つの物体は成層圏から宇宙へ加速し、その後相手を離し今残されているエネルギーをすべて使い、最大のソルジェント光線を背に浴びせ相手をそのまま光の源に押し込み存在そのものを焼きつくすように光で闇を照らしそれを見届けたダイナは、力尽きようとしていたが。同じく地球から主人を迎えにモスラが太陽の光を増幅させ、ダイナのカラータイマーとプロテクターに光を当てて力を回復させるがその行動は、モスラの寿命を削ることもあったがそれは、モスラが育て親である巽に出来る恩返しだった

その頃地上ではイレギュラーが発生していた。ゆりかごが徐々に都市部に向かって高度を落とし始め、このままだと墜落し被害は甚大になるが止める術もなく破壊となるとすでに時間切れでもし、破壊に成功したとしても、破片が降ってきて。皆巻き込まれる可能性が非常に高い。

ティグリスやネルドラントが少しずつであるが装甲を剥がしていくも例え2大怪獣と言えど、時間が足りない

そこをどけえ!!!

空から聞こえ、巽はダイナに再変身し、ストロングでゆりかごを持ち上げ何とか海上まで運ぶ。

「巽君、そのまま海でばくはつさせることができへん?」

「残りの力でもさすがにきついですねその戦艦の武器となら行く気がします」

「了解や」

ダイナはソルジェントを使うためにフラッシュに戻り腕を縦に伸ばしエネルギーを溜め、アカンシエルとともにチャージソルジェント光線を発射し、それを爆破した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3441o/>

ウルトラマンダイナアナザー STRIKERS

2011年10月12日22時51分発行